

はじめに

2年次主任 樋口史明

3月30日の登校日に開いた1学年集会の中で、「東日本大震災を体験して」というレポートを書いてもらう意義について話をした。これほど大きな震災にあったという体験の中で自分が感じたこと、考えたこと、行動したことを記述することはこれまでの自分の思考・感情を整理することになる。それはこれまでの自分を外から眺めることであり、ぼんやりとしたものを明確にする作業でもある。ニュースについて、不便な生活について、ボランティアについてなど今回の震災についてのまとめをすることはそれを書いた本人にとって意味があることである。そうして集めた新2年生280名分のレポートを全部2回ずつ読んでみた。そこには280種類の震災があり、280種類の経験があった。すばらしい感性に唸り、人の心の温かさや強さに目頭が熱くなった。せっかく書いてもらったこの記録を印刷して全員に読ませたいと思うようになった。現に5組担任の佐藤秀樹先生は5組全員分を一人でパソコンに打ち込んで印刷して製本して配っている。ただ、1クラス分ならともかく280名分となると印刷したら膨大な量になってしまうし、多すぎて全部読まない可能性がある。そして何より、今回のレポートは題材からして取り扱いには慎重を期す必要があり、場合によっては人を傷つける可能性まで考えなければならない。本来の目的は生徒本人のまとめであり、必ずしも他者の目を気にしないで書いている生徒もいる。本人の意図しないところで他者を傷つけることはこのレポートの趣旨に反している。そこで、280名分のレポートから38名分だけ選んで2年生全員に配ることにした。選んだ決め手は人それぞれであるが、それぞれに何かきらりと光るものを感じたことは間違いのない。それはその生徒だけの経験であり、感受性であり、表現力である。そういった感性を感じ取ってもらえればよいと思う。

震災からすでに2ヵ月以上が経過し、沿岸部や福島第一原発周辺以外では復旧も進んで震災以前の日常生活に戻っている所が多い。かく言う私も日頃の激務に追われて震災のことを考える時間がなくなっている。しかし、亘理町や山元町では現在でも全国各地から来ているボランティアの人々と共に泥のかき出しや瓦礫の撤去を行っている。津波の被害はたかが2ヵ月程度で片づくものではない。放射能の脅威は丸森町や角田市にも迫っており、故郷を失う恐怖や安全な食生活への不安は消え去るものではない。復旧復興に対する政府対応の遅さに各方面から批判が噴出している。あまつさえ被災地のことを差し置いて政争をしている始末である。実際のところ、「復旧」さえまだ始まったばかりであり、「復興」なんてまだまだ遠い先の話である。私たちにできることはあまりにも小さい。しかし、小さいことを多くの人たちと協力して少しずつ積み重ねていくしかない。そのためにも震災での自らの経験や他者の体験を知ることによって醸成されたものをそれぞれの形で今後にかかしてほしい。

## 目次

支援物資を届けに行つて	2年1番08番	菊地諒	3
東日本大震災を体験して...	2年1組10番	齋藤耀	3
東日本大震災を体験して	2年1組24番	赤間菜奈子	4
東日本大震災を通して	2年1組31番	佐々木美由紀	5
東日本大震災を経験して	2年1組33番	佐藤来美	7
東日本大震災を体験して	2年2組09番	菊地晃平	7
東日本大震災を体験して	2年2組21番	平井雅堯	8
東日本大震災を経験して	2年2組22番	山城徹	9
東日本大震災を体験して	2年2組28番	金野紗也香	9
ボランティアを通して	2年3組01番	相原貴次	11
東日本大震災を体験して	2年3組14番	佐藤文弥	11
ボランティアへ行つて	2年3組20番	豊島健太	12
大切な人のために	2年3組25番	跡部菜央	13
東日本大震災を体験して	2年3組27番	阿部瀬里奈	14
震災後	2年3組28番	浦山由希	15
1000年後	2年3組30番	小川有	15
東日本大震災を体験して	2年3組38番	平井 萌	16
原発事故の原因考察	2年4組14番	田中康朗	17
星空を見て	2年4組30番	今野百合香	18
「兼好法師流」時間つぶしを終えて	2年4組34番	佐藤奈菜	19
東日本大震災を経験して	2年5組03番	遠藤廣大	20
東日本大震災を体験して	2年5組21番	村上勇氣	21
東日本大震災を体験して	2年5組22番	柳谷洸輔	22
東日本大震災を経験して	2年5組27番	小國美奈	23
東日本大震災を体験して	2年5組29番	鎌田奈月	24
東日本大震災を体験して	2年5組30番	小松和佳奈	24
東日本大震災を経験して	2年5組40番	渡辺陽子	25
東日本大震災を体験して	2年6組03番	大槻弘晃	26
避難所での感染症対策と精神的ケア	2年6組26番	遠藤裕香	27
東日本大震災を体験して	2年6組27番	小川実華	28
東日本大震災を経験して	2年6組28番	管野宏香	29
東日本大震災を体験して	2年6組30番	木村泉	30
東日本大震災を経験して	2年6組36番	橋本葵	32
東日本大震災を体験して	2年6組38番	水上智佳子	33
東日本大震災を体験して	2年7組05番	岩槻和佳奈	33
患者さんを優先する覚悟とともに			
笑顔あふれる看護師になりたい	2年7組06番	大内郁美	34
東日本大震災を体験して	2年7組22番	杉山可奈	34
東日本大震災を体験して考えたボランティア	2年7組25番	高野清楓	35
私の体験	2年7組31番	星美沙紀	36

## 支援物資を届けに行って

### 2年1組8番 菊地諒

東日本大震災から6日後あたりから、父が白石市で鮭フレークやのり佃煮などの食品製造の会社をしていて地域のNPO団体に入ってる事もあり、津波で特に被害の大きい被災地に支援物資を届けに行く手伝いをする機会を得ました。トラック二台を緊急車両に登録し、その中に会社にあった食品をできるだけ詰め込み、他のNPOに入っている会社の方々からの衣服類、野菜、米や温麺も詰め、亘理、山元、閑上、名取まで行きました。

亘理まで行く山道を越えた瞬間、息ができませんでした。テレビで毎日のように放送していた津波被害の映像、あの光景が自分の視界全体にアナウンサーのナレーション無しの無音で広がっていました。後ろを振り向いたら来た道までも無くなっていそうので避難所に着くまで僕は車のバックミラーもサイドミラーも見ることが出来ませんでした。

避難所に着いて物資を配り、本当に泣いて喜んでくれる人達を見て本当に来て良かったと思いました。その後に閑上に行ったときは、僕はテレビであまり閑上を放送していない理由が分かった気がしました。道もまだ整備されておらず、いろんな場所で自衛隊などの方々が長い棒とブルーシートを持って瓦礫から死体を捜していました。道の横、橋の下などには並べられて置かれている数えきれない数のブルーシートがありました。それでも、そこで会う人々ほぼ全員が笑顔で「ありがとう」と言ってくれて、僕は父が見てないところで泣きました。

少しずつ普段の生活が戻っている今、僕たちが出来ることすべきことは、ボランティアをする人しない人、した人もしてない人も被災地の人達と一緒に頑張り、日本の復興のためにできることを共に考える事だと思います。被災地に行ったからこそ思える事、それは「頑張れ」ではなく「頑張ろう」。一方通行ではなく双方で繋がる思いが日本を一つにまとめ、早い復興ができるのではと思いました。もちろん、今でも思っています。

## 東日本大震災を体験して...

### 2年1組10番 齋藤耀

私は、今回の震災で家を失いました。幸い家族や大切な友達は皆無事でしたが、今でも近所の人の多くが行方不明のままです。

地震の時、私は部活動をしていました。友達といつものようにロードワークに行くために球場を出た直後、地響きと共に経験したことのない大きく長い横揺れに襲われました。球場脇の家のブロック塀はテレビのCGで見たような激しい倒れ方をして、家も崩壊しそうな勢いで大きく揺れてたことを今でも鮮明に憶えています。その後、一度だけ父親と連絡がつき、私は白石の祖母の家に避難することになりました。電気も携帯も繋がらないとても不安な時間を過ごしました。家族と再会できたのは、夜の10時を過ぎたころでした。一晩白石で過ごし、翌朝山元町へ向かいました。山元町に入った途端辺りの景色は一変していました。変わり果てた街並みを目の前にして私は言葉が出ませんでした。悔しさか悲しさか分からない感情がこみ上げてきて、自然と涙が溢れ出し、何も考えられない時間が長く続きました。「誰も悪くないのにどうして....」それしか考えられませんでした。

それからしばらくしてから家のあったところを見にいきましたが、瓦礫しか残っていませんでした。海が家の前まで広がっていて地形も相当変わってしまったのだと感じました。

私は避難所ではなく白石に住むことになり、新しい生活がスタートしました。電気、水道などのライフラインが復旧し、電車が走り、部活が始まり、普通に近い生活が送れるようになりました。しかし、落ち着いたのは良いものの私は震災のショックと目標が無くなったことで脱力感が体から抜けず、不安定な状態になり何もできなくなってしまいました。頭では前向きになろうと考えても震災前の生活には戻れないという事実は私にとってあまりにも大きく、なかなか立ち直ることができませんでした。正直なところ今でも立ち直れているのか分かりません。時々とても不安な気持ちになります。できることなら震災のことは何も考えたくありません。実際、今こうして体験したことを書いてることさえも少し苦痛に感じます。

だから、私はもう震災のことは全て忘れ普段通りの生活をして、これからの事だけを考えていきたいと思います。今ならもう前向きになれる気がします。そして私のような思いをする人がいなくなるように復興に携われたらいいなと思います。みんなにもっと被災地のことを知ってもらいたいとも思います。まずは、小さなことでも今自分ができることを精一杯頑張ります。

## 東日本大震災を体験して

### 2年1組24番 赤間菜奈子

3月11日、大震災が起きたその瞬間、私は友人と東京ディズニーシーに行っていました。地震が起きたのはジェットコースターから降りた直後でした。木造の建物が大きく揺れ、一瞬何が起きたのか理解することが出来ませんでした。その後すぐ「まさか...」と思い、あの長い揺れの中「家族は、親戚は、家は大丈夫か?!」という考えが頭の中でぐるぐると駆け巡りました。揺れが治まって数分後、周りにいたスタッフがすぐに状況を説明し、混乱する大勢の人々を誘導し避難させたり、その後、雨が降り気温が低くなった時には人数分のタオルやカイロ、ビニール袋などを配ったりと対応の良さと早さにとっても驚きました。地震から5時間ほど経ち、安全な建物やレストランなどに避難し、私たちはその床に座り、余震が続く中必死に家族と連絡を取ろうと努めながら一夜を過ごし、たった1通の父からの「皆無事です。大丈夫ですか?」というメールが届き、まだまだ不安はありましたが安否を知る事ができ一安心しました。そして、その間も全スタッフが声をかけて下さったり軽食を出してくれたり、私たちが少しでも安心して怪我の無いようにと全力で努めて下さいました。あの震災の中、膨大な人数の中で混乱を抑えて怪我人が1人も出なかったのは、スタッフの皆さんの対応の良さと早さがあったからだと思います。私はその後、横浜の大学に通っている兄の所まで友人と電車で行き、約一週間後にはなんとか家に帰ることが出来ました。もちろん兄のおかげでもありますが、交通機関で働く人たちが、その人たちにも家庭があり安否が分からずに不安だったにも関わらず、必死に自分の役割を果たしてくれたからだだと思います。そして、自分の家や地域がある程度落ち着いた今、改めて考え直してみると、『仕事』というのとはどんなことがあろうと自分の「役割」というものを、いかに早く、いかに的確に、投げ出さずに人々のために努めることなのだなあと感じました。この大震災は、普通の人では体験できないことを直に体験することができ、沢山のことを考えさせられた一生忘れることのできない出来事となりました。

家に帰ると、電気は通っていましたが水が通ったのは二週間後でした。水は毎日、3度の食事や、入浴、トイレ、洗い水など無くては生きていけないものです。1人10ℓで、数

時間並ばなければ貰うことができず、トイレを流すことが出来なかつたり、何週間もお風呂に入ることが出来なかつたりして、とても不便でそれがストレスに感じたりもしました。そして、自分たちがこれまでどれだけ幸せで、不自由なく生活することが出来ていたのかということ思い知らされました。しかし、今も避難している方々は被災した日からずっと辛い状況が続いていて、私たちにとって当たり前のことが出来ない状態にいるので、私たちが感じた何十倍も何百倍もストレスや不安を途切れることなく感じているはずで

そして、今回の大震災で被害の大部分の原因となったのが「津波」です。私は、テレビ画面に映し出される映像を直視することができず、しばらくの間はそのニュースが始まってもチャンネルを変え、その現実を理解しようとしませんでした。しかし、家族を失い家も失いながらも笑顔を見せ、周囲の人と協力しながら助かった命を無駄にするまいと懸命に生きている人々を見て「自分にはこの現実を知る義務がある。これから、復興という長い道のりの中で、将来自分も必ずどこかでこの被害に立ち向かうはずだ。そして、たった今立ち向かっている人々の手助けをするためにも、津波が残した爪痕をこの目で見なければならぬ。」と思いました。

実際に被災地に行ってみると、次々と目に飛び込んでくる残酷な現実。見渡す限りあちこちに散りばめたような車、根っこからなぎ倒された何本もの木や電柱。仙台平野は、まるで砂浜のように変わり果てていました。また、私自身も幼い頃に行っていた鳥の海方面に進むと、船が家に突き刺さっている光景があちこちにあつたり、誰の物か分からない女性の靴や服があつたり、家の基礎部分しか残っていなかつたり。まさに、地獄絵図を見ているようでした。本当に言葉がでず、被害の痕を見ては勝手に頭がその瞬間を想像し勝手に涙が出てくる、その繰り返して、あちこちから悲鳴が聞こえてくるようで頭がおかしくなりそうでした。私ですらこんなに打撃を受けているのに、じゃあ家を失った人は？家族を失った人は？...もはや私の頭では想像することすらできないほどのものでした。自分が生まれ育った地が、自分を育ててくれた海、仕事場であった海に襲われ、何もかも奪われた人々の心はそう簡単には戻りません。だからこそ、より大勢の力で、日本国民全員が、世界中の1人1人がこの現実と向き合わなければならないのだと心から思いました。今の気持ちを一生忘れること無く、一生をかけて被災者の皆さんを支援しようと思いました。

## 東日本大震災を通して

### 2年1組31番 佐々木美由紀

3月11日、私は自宅に1人でいました。もともと地震が苦手な人で震度2くらいでもすぐパニックになったりしたので、今回はますますパニックになりただただ叫ぶばかりでした。すぐ机の下に潜り、食器が割れ、すごく長い時間どうすればいいのかわかりませんでした。TVのアナウンサーの「落ち着いてください！」の一言が心を落ち着かせてくれました。すぐ母に電話をしましたが繋がらず、父に電話したら繋がってすぐ迎えに来てもらいました。本当に安心したのを覚えています。その日の夜は互理の両親の職場に避難しました。本当に怖くて、ほとんどの人の安否がわからないし、余震もあって寝れませんでした。

それから数日間は両親のお店を手伝いました。食料品店なので、次の日からお客さんがきて商品はすぐなくなってしまうました。市場にもついて行きましたが、そこでもいつも以上に人がたくさんいて、パンやカップラーメンなどは入荷数を制限されたり、仕入れできなかつたりなど本当に大変な状況でした。店へ戻ってくると、買いだめに来るお客さん

もいました。それを見て、啞然とする自分と納得する自分がいました。そこで初めてこの災害の大きさを実感しました。ライフラインはストップ。買いだめによる食料不足。でもこれはほんの一部の被害。地震の2日後、父と二人で車と自転車で浜吉田にある自宅に戻りました。瓦礫などで進むのにとっても苦勞しました。本当に言葉を失いました。床上浸水でした。とにかく必要なものをもって、すぐ帰りました。帰りの車の中も、目の前の信じられない光景を見つめることしかできませんでした。

次の日、父に「ボランティア募集してるからいってみろ。」と言われたので、友達を誘って役場へ行きました。そして、亙理町社会福祉協議会のボランティアセンターを紹介してもらったので行きました。そこでは「まだ立ち上がっていないので、仕事ができたら連絡します。」と言われました。その後、避難所になっている亙理小学校に行き、何か手伝えることはあるか聞いたら、ぜひ頼みたいということで仕事をしました。ゴミ袋を設置していると、小さい女の子が近づいてきました。「お友達がいないからつままない。」とその子は言いました。私はその言葉を聞いてどう励ませばいいかわからず、「もう少しだから頑張ろう。」としか言えませんでした。こんなに小さい子も頑張っているんだ、と私が勇気づけられてしまいました。次の仕事は服の仕分けです。これは本当に大変で、男性、女性、子供の服をサイズと種類別に分ける作業でした。みんなで手分けして、出してもらったお昼はおにぎり1個でした。避難所の人は毎日これを食べているのだと思い、大変だと思いました。その次は服の配布でした。服は1人3点まで。厳しい現実を見ました。着る服だって少ないけどある。食品だって足りてる。自分がすごく恵まれていると思いました。その約3日後、ボランティアセンターから電話が来たので公民館へ向かいました。初日で5人程集まりました。活動内容は、物資できた服の仕分けでした。最初はみんな初対面だったので慣れませんが、休憩中などに話すようになり、チームワーク抜群になりました！通うようになりだいたい経ったとき、大阪の社会福祉協議会の方々がサポートをしに来てくれました。高田さんという男の方で、積極的に話しかけてくれて仲良くなりました。すごくいい人で、いつも笑顔がたえませんでした。全く知らない人が全く知らない人のためになにかをする。すごく素敵なことだと思います。だんだんボランティアの人数も増えてきています。小さなことでも協力しようという気持ちが増えてることは凄く嬉しいです。

今回の大震災を通して学んだことはたくさんあります。でも、まだまだ学ぶことがたくさんあると思います。普通がどれだけ幸せで難しいか思い知らされたし、当たり前がどれだけ儂いものなのかもわかりました。辛いこと、苦しいこと、たくさんあります。でもそれと同時に、危険をおかしてでも復旧に向けて作業している自衛隊、警察、消防、原発で作業している方々。外国からの支援。たくさんボランティア。たくさん人と人との繋がりが、助け合いがあります。だから、災害にあっていない人、これから生まれてくる人には今の生活がどれだけ幸せかわかってほしいです。いつ当たり前が壊れるかわからないから、人との繋がりを大切にしてほしいです。そして、どんな形でもいいから見知らぬ人のためにも行動できる人であってほしいです。何十年後かにはみんな忘れかけているかもしれません。でも、この3月11日という日を決して忘れてはいけません。だから私は、自分の子供に伝えていきたいと思っています。そして、これからも自分の住んでいる町の復旧に向けて協力していこうと思います。一步ずつ前に進もう東北！

## 東日本大震災を経験して

2年1組33番 佐藤 来美

私は、東日本大震災を経験して普通に生活できることのありがたさを実感しました。地震が起きたその日の夜は、電気もなく真っ暗で、とても心細く、なかなか寝つくことができませんでした。衝撃を受けたのは次の日の朝です。新聞を見ると、これが私の住んでいる県で本当に起こったことなのかと疑いたくなるような写真が載っていました。気仙沼の火の海に、仙台空港の変わり果てた姿。例えるならば、それは戦場のような光景でした。ラジオや新聞から入ってくる、たくさんの遺体が発見されたというニュースに胸を締め付けられるような気持ちになりました。

何日か経ちライフラインも復旧して普通の生活が送れるようになり、ボランティア活動をするようになりました。活動場所は大河原のはねっこアリーナ、内容は食事の配布やお年寄りの相手、支援物資の仕分けなどです。私は、亘理から避難してきたおばあさんの話を聞きました。家は津波に流されてしまったそうです。おばあさんの家は津波に備えて昔から家のまわりに木を植えていましたが、地震の前に切ってしまったそうです。「私は津波警報が出てすぐに逃げてきたけれど、今まで警報が出て避難しても何も起きなかったから大丈夫だろうと油断した人もいたためにたくさんの死者が出てしまった」と言っていました。また、津波が来るまでに時間があつたのも人々の油断を呼ぶ原因になったのだと思います。避難所に避難している人たちは、それぞれに大変な思いを抱えているのにみんな明るく振るまっていました。復興には、悲しむだけでなく前向きな気持ちが大事だと思います。

私はこの震災のことを、祖母たちがいつも戦争時の体験を聞かせてくれるように、次の世代に語り継いでいかなければならないと思います。また、普通の生活を取り戻して来ているけれど、震災が起こった直後の生活を忘れてはいけないと思います。地震が起こってから家族以外の人と全く会わずに心細い思いをしていました。だから、2、3日経って友達が家に様子を見に来てくれたときは、気持ちが明るくなりました。人と人の関わりは大切なことだと実感しました。1人では、これからのことを考えると何でも暗い方向にいつてしまうけれど、みんなと一緒にいると少しは前向きになれる気がします。復興までは20年近くかかるといわれています。大変な道のりだけど、人と人とが協力し合えば必ずできると思います。これからは普通に生活を送れることを感謝し、私にもできるボランティアや募金、節電などで復興に少しでも協力していきたいです。

## 東日本大震災を体験して

2年2組9番 菊地晃平

2011年3月11日午後2時46分。あの瞬間まで続いてきた日常が突如として崩壊した人は数えられないほどいると思う。それと同時に僕が絶対だと信じ込んでいた偏見ともいえる考えも崩れ始めた。「勉強してよい成績をとって大学に入ることができればそれでよい。」と思っていた。幸い白石は被害も少なく一週間ほどで日常の生活が戻りつつあったことで、いつものように学習することができた。しかし、テレビで一人の老人が避難所で家族を待ち続け涙を流しているのを見た時、「何故自分は勉強しているんだろう？」そんな抱いたこともない感情があふれてくる気がした。目の前で悲しみ、苦しみ、嘆いている人々がいるのに自分は机に向かって数字や外国語と向き合っている。今までただただ可哀想と

か思っていた自分はとてつもない偽善者だと強く感じた。将来の日本のために今、自分は勉強するんだ。と言い聞かせたが、それこそ自分を正当化するための逃避だった。考えても考えてもその答えは出ないでいる。これからは僕は自問し続けながら生きていくと思う。そしてその結果を「形」にしていかなければならない。

この大震災を通じて何か人間としての根本を自分に問うことができた。復興には時間がかかるかもしれない。失ったものは多いかもしれない。でも、こんな時だからこそ前を向いて一歩ずつ進んでいくしかないと思っている。

## 東日本大震災を体験して

### 2年2組21番 平井雅堯

3月11日、14時46分。その時僕は、いつものようにテレビを見ながらぐうたらにムダに時間を過ごしていました。地鳴りが聞こえてから数秒、大きな揺れが来て外からはご近所さんたちの悲鳴。あわてて下に降りると、おばあちゃんが外の木にしがみついていた。僕もその木まで行こうと思いましたが、とても動くことなんてできないような揺れに襲われ、僕はずっと家の柱にしがみついていた。それだけで精一杯でした。

揺れがおさまって、僕は状況が飲み込めず呆然としていました。しかし、何度となく襲ってくる余震によってその時間さえも奪われ近所からの悲鳴は止みませんでした。僕は日本で何が起こったのかを把握するべく車に乗り込み、カーナビでテレビを見ました。カーナビに映ったのは別世界でした。そこらじゅうで起きている火災、建物の倒壊。津波の映像を見たときは言葉を失いました。見慣れた仙台空港が海水に飲み込まれていく様子は、恐怖そのものでした。その夜は避難所で過ごしたのですが、避難所はとても寒く、つらい夜になりそうだな、と心の中で思っていました。しかし、実際は避難してきた皆さんがとても温かく、支えあい励ましあいながら暗く怖い夜を乗り越えました。被災してから夜の怖さというものを知った気がします。ですが、それと同時に知ったのは星のキレイさでした。地震による停電の影響なのか、3月11日の夜の星はとてもキレイでした。

慌ただしく1日1日が過ぎてゆき、そして毎日入ってくるのは恐ろしいニュースばかり。僕はそういったニュースを見るたびに、自分はこんなにのうのうと生きていていいのだろうか？若い自分にしかできないことは無いのだろうか？と、自問自答していました。そんなある日、ニュースで流れていたのは家の片付けに四苦八苦しているお年寄りの姿でした。その次の日、僕は同じクラスの村山君と共に白石市役所へ行き、ボランティアの登録をしたのですが、人手が足りているので後日連絡する。とのことでした。僕はそれを聞いて、人の為に何かをしようとしている人がそんなにいるのか。と、感動しました。そして翌々日、ボランティアの要請がきました。初日に行ったのは、偶然にも僕の住む田町の近くでした。その家の中は、地震の恐ろしさを物語るかのような荒れ方でした。本棚が崩れ、食器のほとんどが割れ、重いピアノが壁に穴をあけていました。しかし、その様な悲惨な状況でもしっかりと先を見据え復興を目指す姿勢を見ると、これからを担う世代としてしっかりしなくてはと思わされました。

この震災は僕たちからとても多くのものを奪いました。ですが、この震災に教えられたことも多くあります。それは、日常の大切さでしょう。無駄な一日なんてない。だから、これからへと繋げていけるような、意味のある毎日を送っていきたいです。



## 東日本大震災を経験して

2年2組22番 山城徹

3月11日、東日本大震災。その時僕はグラウンドでサッカーの練習をしていました。大きな揺れと共にグラウンドが隆起し、水が溢れ周りの民家の至る所崩れ落ちました。見慣れ始めていた白石の街は全く別の姿になっていました。やっとの思いで自分の家にたどり着くとすでに電気、水道は止まり、ものが散乱していました。不幸中の幸いと言うのか、家はプロパンガスでガスは使うことができたし、石油ストーブもあったのですぐに暖をとることはできました。しかしテレビは見る事ができないので唯一の情報源はラジオでした。信じられないような言葉が次々に聞こえてきました。その日は度重なる余震でなかなか眠りにつくことができませんでした。2日、3日たっても電気も水も来ないし、ある種昔の人間の生活のように感じました。朝から晩まで家の手伝い、夜は暗くなったらすぐに寝て、朝は日の出と共に起きるといような生活でした。電気がなければテレビもパソコンも、十分な暖をとることもできない。僕たち人間はどれだけ電気という作られたエネルギーに頼っていたのでしょうか。本当に実感させられました。地震から1週間程度で電気がついたときは本当に嬉しかったです。

日本だけではなく、世界からの支援、心温まるメッセージやボランティア…。人ってこんなに暖かいんだなと思いました。そんな人がいる中で、募金を装った詐欺をする人や何の根拠もないチェーンメールをまわして面白がっている人がいるのも現実でした。僕は絶対そんな人にはなりたくありません。例え偽善者と言われようと人の力になれる人間になりたいと思います。もう1つ地震が教えてくれたことがあります。それは家族で過ごす時間の大切さです。僕の家では当然かもしれませんが家族皆色々あり、最近ではみんなで過ごす時間なんてほとんどありませんでした。仕事もない、学校もない、部活もバイトもない。家族みんなが家族のために考え、行動し、朝も昼も夜もみんな一緒でした。地震のおかげで、などとは口が裂けても言えませんが、本当に貴重な時間になりました。

僕の周りにはそれほど被害が無かったからこんな風にしていられるのかもしれませんが。しかし本当に大切なものを失った人達がたくさんいます。悲しみの底にいる人も少なくないはずです。そんな人達が元気になれるように、僕も微力ながら尽くしていきたいと思っています。僕自身、「諦めることを諦めます。」そしていつかまたあの元気な東北に、いやもっと素晴らしい東北に僕たち若者がしていきたいと思うし、していかなければいけないと思いました。その為にまず身近な所から目を配っていきたくと思います。

## 東日本大震災を体験して

2年2組28番 金野紗也香

今までテレビで見ていたようなことが現実になりました。私は白石市民なので被害は少なかった方です。それでも全く被害がなかった訳ではありません。震度は大きくライフラインは断たれ、原発の恐怖もあるはずで、震災のことを軽く考えている訳でもない。でも何故か、今の感情を言葉で表すとしたら「無」です。現実味が無いというか、何もなかったかのように感じられます。被災者である自分が、震災を冷静に観ている、客観視している。津波の被害に遭った地域を直接自分の目で見ればまた違うのかもかもしれませんが、この震災を本当の意味で理解し受け入れられるようになるには、まだ時間がかかりそうです。

地震があったとき、落ちて割れる食器や鉢を見ていました。目の前で起きていることが信じられませんでした。余震が続き、空が暗くなってきて漸く、脳が動き出したような感覚でした。ライフラインが断たれた状況は辛かったです。電気と水がないと本当に何も出来ないと感じました。暗くて寒く、ずっと布団に包まっていたと思います。お風呂も一週間は入れませんでした。そして何より、家族全員が一緒にいることが出来ないのが不安でした。私の父は仙台の会社に勤めています。電車が止まれば帰って来れず、仙台の避難所にいました。普段当たり前のようにしている生活は、とても大切だと感じました。もう一つ感じたのが、感謝です。色々なところからの支援は勿論ですが、もっと身近なところで、親戚です。母の実家が山形にあるのですが、地震から二日が経ったときだと記憶しています。母の兄が、水や食料、石油ストーブ等を持って家まで来てくれました。一度仙台に行き、避難所にいる父を乗せて。久しぶりの暖かさ、癒されるようでした。本当に感謝しています。他にも家族団欒の一時を過ごしたり、友達が心配してメールをくれたり。いざというとき他人は、安心感のあるものだと感じました。

前に「原発は将来的に全廃すべきか」というテーマでディベートを行いました。私は否定派だったので「環境を破壊していった場合、将来的に安全とは言えないのではないのでしょうか。」と言いました。これは環境問題が深刻化しているこの時代で、環境問題と原発の危険性をはかりにかけて考えたら原発全廃なんて言われてられなくなる、という意味の意見でした。私自身、自分で言うおいてこの意見に完全に賛成することは出来ないでいたのですが、否定派にいる以上、説得力のあるものが他に浮かばず、この意見を述べました。福島原発のことを考えると、今の私はこの意見を嘘でも言うことは出来ません。放射能の恐怖を知らなかったが故の、無知な意見だったと思います。それから、ディベートを行ったときは正直、「なんで原発なんか...関わりがなさすぎて意味が分からない」と思っていた部分もあったのですが、そのとき調べたことがこんなにも早く役に立つとは思いませんでした。多少ではありますが、知識を付けていて良かったな、と。今回の地震は予想以上に大きく、原発事故も想定外。沢山の人の命に危険が及ぶこの事故について、「想定外」は許されない」という意見を目にしたのですが、自然の脅威は私達人間には計り知れないものがあると私は思います。確かに許されることではないのかもしれませんが、そこから「自然を支配する」等という考えは生まれてはいけないもので、もしそんなことが実際に起これば、それこそ人類は滅びに向かいます。自然を大切にしてきた日本はこれからも、自然との共存が必要だと思います。

この地震で私が一番ダメージを受けたことですが、大好きなアーティストが出演するイベントに行けなくなったことでした。沢山の人が亡くなっている中、こんなことを言うのもどうかと思います。他の人から見れば小さいことかもしれませんが、でも私にとっては、本当に本当に楽しみにしていた、目標、生き甲斐でもあるイベントでした。一番泣いたのはイベントに行けなくなったときだったし、停電で音楽が聴けなかったときも辛かった。私にとって音楽は大切なものだと、再度実感しました。私はその大好きなアーティストに毎日ファンメールを送っているのですが、地震前には「今日も小さい地震がありました。」地震後には「怖かったです。」という文もあって、前に「感情は「無」だ」と書きましたが、恐怖はしっかり刻み込まれていてみたいです。

感じたことが多すぎたせいか、纏まりがなく伝わりにくい文になってしまいましたが、私の気持ちを表せるのは私でしかないので、自分の体験したことや感情を素直に書いたつもりです。決して良いことではなくても、この震災も脳裏に深く刻まれる「思い出」です。今後に生かしていく為にも、思い出は消えて忘れるものでは駄目だと思います。忘れないために、そのとき感じたリアルタイムな気持ちを書き留めておく。これも大切なことの一つだと思います。

## ボランティアを通して

### 2年3組1番 相原貴次

震災から2ヶ月が経ちましたが、未だ復興という2文字が見えないなか私は5月1日までボランティアを6回行いました。内容は濃く、大変な力仕事となりましたが終わる度に味わうあの充実感は普通の学校では感じる事の出来ないものとなりました。

さて、当初私は今回のボランティアに対して、不明瞭な目的を持ってしかやろうとしていませんでした。「ただ被災地が大変だからやる。」そんな気持ちしか持っていませんでした。しかし初めて津波の被害を生で、自分の眼で確認したとき、「とにかく一刻も早くこの街が戻れる様に微力でもいいから手伝いたい。」と、明確な意志を持つことができました。だから私は常に一所懸命に働き、こんなに一輪車を押したことがない、というぐらい押し、こんなにスコップで泥を掬ったことがない、というぐらい掬いました。また、そうしていくうちに、だんだん作業が楽しくなっていくのをやりながら感じる事ができました。

しかし、やはり私がやったことは微力でしかありませんでした。まだまだ、やらなければいけない場所があります。それにも関わらず、もう終わりとなったことはとても悔いが残ります。けれども、私にとってこの6回だけでもボランティアを経験できたということは、学校で経験することよりずっと価値があったと思います。先程も述べた様に、あんなに明確な目的を持ち行動したこと、そして大変な充実感を得たということ。それらを必ず今後の人生の糧にし、生きてゆこうと思います。

## 東日本大震災を体験して

### 2年3組14番 佐藤文弥

3月11日東日本大震災が私たちに襲いました。幸い私の家は電気、水が止まったくらい被害で済みましたが、沿岸部では地震後襲った大津波で壊滅的な被害を受けました。それに加えて、福島第一原発の事故は我々に見えない不安を与え続けています。

この大震災で感じたことはあまりに多いですが一つ一つ挙げていきたいと思います。まず一つはライフラインの重要性です。私の地区では電気が五日、水が二週間ほど止まっていた。その間はこれまでにない不便な生活の繰り返しでした。懐中電灯などは常に使える状態にしていなくてははいけません。水にしても食器を洗わなくていいように、食器にラップを巻くなど生活の知恵を多く使いました。これからはよりしっかりと防災グッズなどの準備が必要です。二つ目は我々は何かに生かされているということです。電気が点くようになったのも、水が出るようになったのも多くの人たちが直してくれたからです。原発事故にしても命がけで戦っている人々がいます。また世界各国でも支援の輪が広がっ

ています。我々はこのような人々に感謝の念を忘れてはいけません。

しかしこのような支援が行われている中、私は無力でした。いくら津波の映像を見ても、何の協力もできません。ボランティアに行くという形もあったかもしれませんが、自分にはその行動を取るまでの行動力がありませんでした。言い方がおかしいですが、今回被災した人のために働いていた人が羨ましくも感じられます。何も出来なかった自分が悔しい。そこで、いま自分が出来ることを考えると最終的には勉強することだと思えます。今回の震災に役立たなかった自分。今度どこかでこのようなことが起こったときのため、その時最前線で戦うため。節電・節水を行いながら、少しずつ募金をしながら、未来の日本のために。それが自分たちの使命だと思えます。

また今回自分が気になったことは原発についての会見の度に出る、「直ちに健康に影響を与える数値ではない。」という「直ちに～ない」という言い回しです。これは国民に対して「大丈夫だ。」と言いたいのかかもしれませんが、放射能の与える影響は数十年後に発ガンさせるなど、長期にわたってのものがああります。自分はまだ16です。直ちに影響が出ないと言われて誰が安心するでしょう。その発言の真意は分かりませんが将来的になんらかの影響があったときのための逃げではないのか、私はそう感じてしまいました。また、もしそうでないのなら、それをしっかり報道しないマスメディアにも問題があると思えます。風評被害が今回多く出ていますが、風評というのはマスメディアによって大きく左右されるものです。マスメディアにはもっと日本国民のことを考えた報道を行なっていただきたい、そして、日本政府。今は内部で批判をしてもしょうがない。国民を第一に考えた政治を私は期待しています。

## ボランティアへ行って

### 2年3組20番 豊島健太

3月11日の地震以来、私は津波によって町に壊滅的な被害を受けた亘理町や山元町へ数回ボランティアへ行きました。ボランティアへは私の所属する山岳部の生徒と顧問を合わせ9名で行きました。初め、顧問からボランティアに行くことを知らされた時、快く承諾はしましたが、私はどこか形式的に考えていました。

- ① 「被害の少なかった地域に住んでいるのだから、行くのは当たり前。」
- ② 「ボランティアは良い事なんだから、良いと思った事は進んでやるべき。」
- ③ 「どうせやる事もないし、ボランティアに行くか・・・。」
- ④ 「テレビでこんなにも報道されている現場をこの目で見てみたい。」

そんな考え方でした。

ボランティア初日、長い間体を動かさずにいたせいか、何かのスポーツをやるかのように楽しく働くことができました。自分は実際に被災地へ行って役立つこと事をしたんだ。という優越感からきた楽しさだったのかもしれませんが。しかし、活動をした家から帰る時、そういった自分の考えが軽いものだったと思い知らされました。普段、私は物事や他人に対する感情に鈍く、感情や同情、あるいは愛情といったものに対して自分は無関係、遠い存在であると考えてきました。友達にも「お前が感動することなんてあるのかよ（笑）」などと言われる始末でした。その家を出る時、家の主であるおじいさんは、目に涙を浮かべながら深々と頭を下げ、ただ「ありがとうございました。」と呟いていました。その姿を見て、私は初めて心を打たれた感覚を覚えました。私の文章力では文字にすることは難し

いですが、それほど深い感銘を受けました。「どうしてそこまで感謝するのか、私たちがボランティアをするのは当たり前じゃないか。」と、どうにもできない感情に襲われました。その姿は地震から約2カ月が過ぎた今も鮮明に覚えています。

私たちは幼稚園・保育園から小学校・中学校と「道徳」といった、授業で「困っている人がいたら助けなさい。」だとか「自分がされて嬉しいことを他人にもしなさい。」といったようなことを教えられてきました。それはある意味で「刷り込み」のように伝えられてきました。確かにそれは当たり前です。しかし、あくまでそれは他人から植え付けられた考え方であり、自ら生み出した考え方ではありません。それは形だけであり実を伴ってはいませんでした。前に挙げた①、②のような考え方がそれにあたります。学校の刷り込み授業で子どもたちが教わるのは形です。それに「見る・聞く」といった体験をすることで実を添えることができるのです。また私は、インターネットやゲームといったものに冒された考え方をしていました。③、④の考え方を見れば明らかです。常に物事が動き、暇を与えない社会。非現実を描くことで、私たちに刺激を与えるゲーム。このような物が人の感情を奪い、無関心にさせてしまうのです。おじいさんの小さな姿は、それだけで私にこのようなことを教えてくれました。

2回目以降、私は今までとは違った考えを持って活動することができました。自然と、人に対する感情も豊かになったように思われます。日々増え続ける死者・行方不明者の数を見ると心が悼むようにもなりました。挙げればきりがありませんが、今回の体験が私に大きな変化を与えてくれたのは明らかです。今回そのような変化を与えてくださった亘理・山元の人たち、そしてその機会を与えてくださった先生に感謝したいと思います。

ありがとうございました。

## 大切な人のために

### 2年3組25番 跡部菜央

私は、3.11の地震で友達を亡くしました。父は恩人を亡くし、母に関しては生まれ育った故郷の町並も、友達も失いました。色々なものを一度に失いましたが、世の中にはもっとたくさんのもを一瞬で奪われた人々が大勢います。今でも大切な人に会っていない人もいます。テレビでこの惨状を見て聞いて、心を痛めている人もいます。日本中が悲しみ、絶望と感じた日から、2カ月が過ぎた今、私は人間の強さを、日本人の強さを、痛感しています。あの日からしばらくは悲しみに浸っていたのですが、少しずつ未来のために動いています。

私は震災から1週間後、知人の整骨院の先生と一緒に、昔学んでいた知識を活かしてマッサージのボランティアをして避難所をまわりました。はじめはみんな「もう終わりだよ。」と立ち上がることを諦めていました。しかし日が経つにつれ、「今度おじいさんの車で孫に会って来るよ。」「早く息子と一緒に晩酌がしたい。」と、これからの話しをするようになりました。「今年はお祭りに来にくいだろうから、全国の人が来たくするような企画を考えないとな。」と言った人がいて、その人は次に「嫁や娘にも見えるくらい、賑やかにしないと。」と言って笑いました。おじさんは、家族を亡くしていたのです。すごく驚きました。どうして笑えるのか、そんなに前向きになれるのかわかりませんでした。だけど、逆に失ったものが大切だからこそ人を強くさせるのかな、と今は思います。大切なもののために、守らなければいけないそれぞれの想いがあるんだと思います。同じように大切にしてもらっ

ている自分は頑張って生きて進んでいかなければいけないんだとも思います。

テレビを見ても、避難所で聞いた話も、母の故郷で聞いたことも、たくさんのを失った人や、大切な人を失った人の方が、その失ったもののために強く、強く、前を向いて進んでいました。人が、底から這い上がるエネルギーというのは、かけがえのないものを守るための強さだと思います。言葉にすると簡潔ですが、守るものは人によって十人十色で、その方法も違うと思うけれど、人の心の根本的な強さはみんな同じだと思います。私も、父も、母も、友達も、全員が誰かを想って、誰かに想われて、守り合っているんだと思います。だから私は、亡くした友達のために、いつまでも落ち込まず、前を向いて私がやるべきことを、頑張ろうと思います。

## 東日本大震災を体験して

2年3組 27番 阿部瀬里奈

地震が起こっている時は、何が起きているのか理解できませんでした。水槽が倒れたせいで床は水浸しだし、外に出たら気持ち悪くなる程のアルコールの匂いがして。笑えませんでした。

<災害ボランティア>

家にいてもすることがなかったので、大河原町の社会福祉協議会に行って老人ホームで災害ボランティアを始めました。いつもの数倍はおじいちゃん、おばあちゃんがいるのに、職員の方たちは半分くらいしかなくて。地元に戻れずに泊まり込みで仕事をしている方もいて、ボランティアが手伝いに行っても人手が足りないようでした。お年寄りの方たちの中には閉上や互理から来て、子供や孫を津波で亡くしてしまったと悲しんでいる人もいて。私たちは掃除やお年寄りの話相手しかできなかつたけれど、それでも、ありがとう、とかお疲れ様、とか声を掛けて頂いたことはかなり嬉しかったです。まだまだ、災害ボランティアは続くので被災者の方たちの助けになれば、と思います。それから。ボランティアって、自分たちだけでやろうと思ってもなかなかできなくて、炊き出しや物資の配給などいろいろ思いつく事はあるのですが、どうしても衛生面やごみの問題などで多くの案が却下されてしまっています。まだまだ沢山の人が困っているのに、良いのか悪いのかわからないけれど、もっとこんなボランティアが増えて、誰でも参加しやすいようになったらいいのかな、と思います。

今回の震災で失ったものは沢山あるけれど、得たものもいくつかあると思います。私は、大切な物を幾つか捨てなくてはならなかつたし、塩釜にいる友達も数人まだ連絡が取れないし、亡くなってしまった人もいます。でも、給水やボランティアなどで沢山のひとと知り合つたし、ライフラインが途絶えたことで今までの生活がどれほど便利だったのかも知りました。テレビでは東北・関東地方ではない人たちが応援してくれていて、皆、かなり勇気づけられたと思います。本当に、今まで接して来なかつた人たちが助け合い、協力して東日本を再建させていくのは素晴らしいこと。そうやって、時間が経って、世界に類をみない天災だって、どうにかなるって。

## 震災後

2年3組28番 浦山由希

大きな地震がありました。屋根の瓦が落ちました。棚の食器が落ちました。テレビが倒れました。家が崩れてくるのではないかと思い、今まで生きてきた中で最も死を近くに感じました。長い揺れが終わってもなかなかテーブルの下から出る気になれませんでした。家族が帰ってきて、やっと一歩動きました。家の中を見てまわりました。本が散乱していました。ガラスだらけの部屋がありました。

でも、まだ笑えました。

冷蔵庫から飛び出して床に転がった野菜を見て笑いました。

こんな日に携帯電話を忘れて出かけた姉を笑いました。

夜になり家の中が暗くなって初めて不安になりました。ただの停電だと思っていたのが夜まで続き、何が起きているのか情報がほしくなりラジオをつけました。海岸付近がとてつもなく大きな津波に襲われたことを知りました。

「荒浜に2、300人の死体があがったらしい」

仙台から帰ってきた父が言いました。その時、地名が出てきたからか、数字が出てきてからか、それとも「死体」という言葉のニュアンスのせいかわかりませんが、すごく怖くなりました。一気に地震がずっとリアルなものに思えました。

4月になり、久しぶりに外に出かけました。通行止めになった道路や崩れた家を見ました。買い物のために開いているお店を探して歩きまわることすらなくなり、部活動のための学校への行き帰り以外はほとんど家を出ていなかった私は、その光景に再び恐怖を感じました。同時に自分の3月11日の記憶が薄れていたことに気がつきました。毎日ニュースで被災地の様子を見て、被災者の人たちの声を聞いています。余震もまだ続いています。原子力発電所では命がけの復旧作業が行われています。それでも、あの日何があっても何を見たのかは覚えているのに、なんで不安になったのか、何に恐怖を感じたのかが少しずつ曖昧になってきていました。

時間が経つにつれて電気や水道がまた当たり前のものようになり、震災が他人事のような感覚になっています。しかし、決して他人事ではありません。今後もまたこの感覚は失われてくるかもしれません。でも、この出来事とともにしっかりと覚えていたいと思います。

## 1000年後

2年3組30番 小川有

「2011年3月11日」

この日は私にとって、いや、きっと私だけではないだろう。日本中の、特に東北の人にとって嫌でも忘れられない日になった。来るとは思っていたが、まさかあんなに強い地震が来るとは思わなかった。水が出ない、電気も使えない、更に都市部ではガスも使えないという危機的な状況の中で私はただ恐怖を感じることにしかできず無力さを情けなく思った。

父は避難所を管理しており、会えたのは震災から4、5日後のことだった。父の話を知っているうちに、私は避難所の現状を知った。大きい避難所でなければ救援物資が届くのが遅いこと、災害時には連携するはずになっている周辺地区からの支援が全くないこと、物資が入ってきても偏りがあり、被災者のニーズに応えられないこと。あげれば他にもたくさんある。母も避難所で手伝いをしていたが、両親からの話で共通して思うことは、もっと災害時の対処法をよく考えておくべきだった、ということだ。

実際、岩手の沿岸部にある周りが山に囲まれた小さな村では、津波が来たときの対処法を徹底的に考え、村の住民みんなが高台に逃げれるように年に数回シミュレーションを行っており、その結果今回の地震によって引き起こされた津波による死者は0だったという。私はこの話をテレビで知って感動したと同時に悲しみを覚えた。もしもこの村と同じことを南三陸町や気仙沼の人々がしていたとしたら。死者が0とはいかないまでも、今よりは少なかったのではないだろうか。これもテレビで知った話になるが、今までは津波警報が発令されても大きな津波が来なかったから今回も大丈夫だろう、と思って逃げなかった人が多数いたらしい。失われてしまった町は私たちが頑張れば復興できる。だが命は戻ってこないのだ。私たちがどんなに頑張っても、どんなに町が元通りになっても、そこにあった命や人の温かさは二度と返ってこない。

こんな悲劇を二度と繰り返してはいけない。そのためにも、我々新しい世代が今自分にできることをしっかりやっていく必要があるのではないだろうか。これはよくある綺麗事に聞こえてしまうかもしれないが、本当に大切なことだと思う。1000年に1度と言われる大災害、1000年後の私たちの子孫には今のような辛く、苦しい思いはさせたくないものだ。

## 東日本大震災を体験して

2年3組38番 平井 萌

3月11日午後2時45分に東日本大震災が起こった時、私は部活の友達と中学の友達の2人と阿武隈川の上で常磐線に乗っていました。初めは、何が起こったのか分からなくてワッペンでニュースを見てすごいことになっていたのだと知りました。ですが、テレビの中での出来事としてしか見ていなくて実感なんか湧いていませんでした。携帯電話もつながらなくなって、3時間近く電車の中に閉じ込められていました。その中で私は阿武隈川に流れてきた30センチくらいの津波を見ました。しかし、30センチくらいだったので危機感もなく、すごいと思うくらいでした。繋がらなかった電話が奇跡的に母と繋がった時に母が『津波本当に来た!! 家流されたかも』と言っていて母の後ろから私の幼馴染も『私の家流された』と涙声で言っているのが聞こえて初めは大げさだな、と思っていたのですが、だんだん怖くなってきて、早く家族の所に行きたくてたまりませんでした。結局その日は電車が動かなくて、私は一緒にいた中学の友達のお兄ちゃんの車で役場までおくってもらうことになりました。道も混んでいて、信号も電気もついていない暗い道を走ってようやく山元町に着いたのは震災から約5時間後でした。車に乗っている間、山元町に近づくにつれて道が陥没していたり、家がつぶれていたりにして不安が募っていきました。役場に着いても人が多く、暗いためになかなか家族に会えなくて泣きそうになっていた時に中学の友達が私を支えてくれました。その後、家族に会うことができました。

次の日、母と家の近くまで行ってみました。車は走れても道路には流木や泥の塊や車、家電製品などがたくさんありました。その日はがれきが多いことや水がまだ引いていない



ということと、遺体などがたくさんあるため家までは行けませんでした。目の前に広がる地震雲や町を見たとき、現実なんだと実感しました。私の知り合いでも数人亡くなってしまった人がいます。私の家族は運良く全員無事でしたが、友達の家族や先生を亡くしました。その他にも津波に流されたという人、一晩家の2階で過ごしたという人がたくさんいます。幸い私の家族は全員津波を経験していません。ですが、地震直後の父から来た『逃げろ!』のメールがなかったら母は逃げていなかったと言っていました。たくさんの方が亡くなっている中で、今こうやって生きていることに感謝して亡くなってしまった方々の分も私たち生きている人々が頑張っていかなければならないと思います。

私が、震災後初めて自分の家を見に行った時、改めて津波の恐ろしさを実感しました。私の家は海から歩いて10分くらいの場所にあるのですが、その場所から見える景色は今までの私が見慣れているのとは遥かに遠く、物は倒れ、流され、壊され、足元にはコンクリートではなく海の砂があり、松林と堤防で見えなかった海が見えるようになっていました。前まで聞こえていた海の音は逆に全く聞こえなくなり、海は妙にきれいでさらに怖くなりました。この現実が夢であってほしいと心からそう思います。

津波到達予想の6mを超え、実際に来た7mの津波はたった数時間で山元町の半分以上を飲み込んでしまいました。小さい町なのにたくさんの人を失い、とてもさびしい町になってしまいました。私は海が怖くないと言ったら嘘になりますが、それでも私の家があった場所も海も山元町全部が本当に、本当に大好きです。時間はたくさんかかるとおもいますが、いつかまた、前の山元町のように戻れる日が来てほしいと思います。山元町民なら絶対に復興させられると思います。私はこの大津波と東日本大震災を絶対に忘れないで、1日でも早い被災地の復興を願い、目標として頑張っていきたいです。

## 原発事故の原因考察

2年4組14番 田中康朗

今回の東日本大震災で、日本は原発事故という本来あってはならない事態に直面しています。現在進行形で収束の兆しを見せないこの事故は、規模として、チェルノブイリに次ぐレベル5の認定を受けました。なぜここまで大きな事故に発展してしまったのでしょうか。私なりに考察をしてみたいと思います。

まず一つ目の原因は、原発の津波対策の甘さです。福島第一原発での予測の津波の高さは5m程度で、十分な対策とは言えません。女川原発は津波の直撃を避けたということもありますが、津波の想定は14m前後であり、大規模な事故には至りませんでした。しかし、そういった対策には常に想定外の事態が起こるものです。事故がいつこうに収束の兆しを見せないもっとも大きな原因は、やはり事後の対応でしょう。まず、東京電力が主体となって対応をしたことに問題があります。電力会社として、計画停電などは実行したくないでしょうから、やはり原発を廃炉にすることに抵抗があったのではないのでしょうか。海水注入に踏み切るという決断が遅れたのはこのためでしょう。これは国の中の、原子力関係に対応する機関の規模が小さいためです。今後、法整備を行い、国の機関主導の対策が迅速に行われるようにしなくてはならないと思います。

今回の事態は、1000年に1度の規模の大災害であり、原発の件に関しては確かに想定外の事態だったのかもしれませんが、しかし、ある意味加害者である東電が想定外という言葉を使うのには憤りを覚えます。ある種の民間企業的意識が欠如しているのではないで

しょうか。今は全力で事態を収束させ、収束してそれで終わりではなく今回の事故を戒めとして、新たな対策を講じていくことが重要であると考えます。

## 星空を見て

2年4組30番 今野百合香

3月11日午後2時46分。

あの日あの時を境に世界が変わった。

何の前触れもなく訪れた非日常、未だに信じられないあの震災の後、自分は何かしら得ることができただろうか。

地震発生時、私は学校に居た。自宅に帰るまでの間、家族の無事を祈った。こんな事にならなければまだ気づけなかったであろう、“家族の大切さ”。

「本当に大切なものは、持っている人より、持っていない人の方が知っている」地震のせいで、ようやく気づくことができたと思う。父とケンカしたり、母とふざけあったり、兄を困らせたり。今まで送ってきた何気ない日常が、如何に幸せだったのかが分かった。本当に失う前に、気がつけて良かった。

地震後最初に迎えた夜、日が暮れることに恐怖を抱いたのは初めてだった。ライフラインが全て断たれ、外はあっという間に暗くなった。太陽が沈むと暖をとることもできず、何枚も服を重ね着して、私は外に出た。どこの家にも明りは点いておらず、いつも見える景色がとても淋しいものに見えた。月明かりだけに照らされた道に、自分の影だけがポツンとあるのが、現実味がなくて、夢の中を散歩しているような気分だった。それでも星だけはいつもよりたくさん見えて、とても綺麗だった。真っ暗な公園で星を見ながら、私は「自分はどれほど小さな存在なのだろう」と思った。

いつもは見えないような星も、ずっと昔からそこにあって輝いていた。これからもずっと、それは変わらずに輝き続ける。地震が来ても、来なくても。自分が居ても、居なくても。たとえ人類が滅んだとしても、きっとこの景色は変わらない。

今まで見えなかったものの本当の姿を見ることができた気がして、私はほんの少し感動した。

たとえ何があったとしても、日は昇るし、沈む。人間では太刀打ちできないような大きな力の中に、私たちは存在している。地震翌日、いつもと変わらずに昇った太陽を見て思った。そして、今ではこう思う。自分は「生かされている」と。

自然の脅威を忘れてはならない。地球は偉大だ。しかし厳しくもある。今回の地震で多くの人が被害にあっている。しかし、地球は何も変わらない。ある意味無情だ。

変わるべきなのは、私たちであるということだろうか。

今回の地震で、自然と「共に生きる」ことについて考えさせられた。

## 「兼好法師流」時間つぶしを終えて

2年4組 34番 佐藤奈菜

今回の「東日本大震災」は連日テレビでの報道が絶えないほどの深刻な被害を、東北を中心とした各地にもたらしています。その中心地となった宮城県でしたが、私が住んでいる柴田町は幸いなことにライフラインが断たれた以外、大きな被害はなく、民家も倒壊などはあまり見られませんでした。そのため、私にはただただ長い時間「暇」ともいえる時間を過ごしていました。そんな中で私が兼好法師のように考えごとをつらつらとしていたその内容を今回は作文しようと思います。きっと、水の有難み、人と人とのつながりなどは他の人がもっと上手に書いていると思うので私は割愛させていただきます。

特に私がこの被災生活の中ずっと考えていたことは「言葉の薄っぺらさ」です。電気が復旧される前はラジオから、復旧してからはテレビから我が家は常に情報をもらっていました。その番組内容はたいてい被災者へのメッセージが含まれていたり、CMにも被害者への励ましなどが多く盛り込まれていました。「立ち上がろう日本」、「僕らは誰も一人じゃない」、「頑張れ宮城」...など、様々な励ましがテレビから流されました。私はそれらを聞く度になぜか心にもやがかかったような思いを抱えました。どの言葉も被災地を励ますには足りていないし、何もかもがありきたりで何十年も使い古されたようなものに思えてならなかったのです。それに、芸能人をはじめとしたいろいろな人がコメントを發表していましたが、すべて言葉が違うだけで同じような言葉しか言ってないようにも思えました。かと言って、私も何かこれといった励ましを思いつくことはできませんでした。今も考えていますが、それは全部自分がかもやもやした気持ちになったメッセージと何ら変わりのないものに思えましたし、被災者の方たちからとれば「他人事」としか考えていない人の言葉にもとれるように思います。「言葉は魔法のように人の心を動かせる」と言う人もいます。でもそれはきっとすごく難しいことなのではないかこの震災を通して改めて痛感させられました。いつの日か、この震災で心に大きな傷を負った人々を真に心の底から癒し、励ますことのできる一言を私も見つけることができればいいなと思います。

また、今回の震災によって私は今までにないほどの行列に並んだのですが、その時並んでいた人の中で誰も列を乱すような行動をとる人がいなかったことも私は気になりました。私は以前、テレビのニュース番組でとある国の被災地での配給所の映像を見たからか、「配給所＝混乱」というイメージが根付いていたので気になったのかもしれません。そのニュースの中では、「その国の配給所は配給を受けようとする人でごった返し、押し合いへし合いの大混乱でケガ人も出た」と言っていました。だから私は給水所に初めて行った時はすごく不安に思っていました。ずっとその時に見た映像が脳裏にちらついていたからでしょう。しかし私の心配は杞憂と終わりました。私が行った時にはすでに給水所とされた公民館の建物を取り囲むように1列の長い行列ができあがっていたのです。テレビでは「東北人の粘り強さでこの困難を乗り越えて下さい」などという励ましの言葉が流されていましたが、私も育った環境によって人々の気質が変わるなどということはあるのではないかと思います。日本の人々がこんな急な震災においても落ち着いて行動し、大人しく行列をつくることができたのは私たちが育ってきた環境によるものでしょう。もちろん、私が見たニュースの国の人が悪いと言っているのではありません。きっと彼らがそのようなしなければいけない、生きていけないようになってしまう劣悪な環境こそが正しい着眼点だと思います。それに対し、私たちはとても恵まれた環境にいるのだと私はこの給水所での光景を見ながら改めて再確認することができました。震災により、もう一度昔見た映像につい

て考えを深めることができたのは私にとってすごくプラスになったのではないかと感じています。

大震災から1カ月以上経った今、私はほとんど震災前と同じライフラインを確保できています。だからこそ、こういったことに頭を働かせることができるのかもしれませんが、きっと、もっとひどい被害を受けている沿岸部の人々は毎日を生きて精一杯でしょうから、この震災に光を見出すことは難しいでしょう。けれど、今回の震災は悪いことばかりじゃなかったと私は思います。私のように震災をきっかけに、もっと広い範囲に考えを広げることができた人もいるでしょうから。いつの日か、今暗い日々を送っている人もこの震災に光を見つけられることを私は祈っています。先ほど書いたように私は未だにそういった大変な状況な人を本当の意味で励ませる言葉を見つけることができていませんが、心から被災者のことを願っています。

## 東日本大震災を経験して

### 2年5組3番 遠藤広大

私は生まれて初めてこのような大震災を経験した。地震が発生した時は外で部活を行っていた。ゴーという地響きとともに急に左右に大きく揺れ始めた。あの時は本当に死ぬのではないかと感じとても怖かった。その後家族全員の無事を確認できた時はとてもうれしく改めて家族の大切さを感じる事ができた。

今回の大地震でこれから考えなくてはいけないことがたくさん出てきた。

- ・原発のこと・津波に対する対策・救援物資などの問題・避難所に関する問題・デマ情報
- ・買占めの問題・風評被害.....など他にも多くの問題がある。

父は消防学校の教官をしていて、学校が救援物資の中継所になっていたのだからそれについての話を聞くことができた。ニュースではたくさんの物資が送られてきており体育館にたくさんの救援物資がある映像を見ていたので、物資に関しては何の問題もないのだろうと思っていた。しかし話によると、物はあるけれどそれを配給するときに問題が起こるらしい。例えば、食べ物を配ろうとしたときに同じものが人数分なかったりすると、平等ではないということで配れないのである。他にも野菜類は炊き出しのシステムがあるところでは配れるけど、そうでないところではただの荷物になってしまう。配りたい気持ちは山々だったのだが配ることができなかつたので辛かったと言っていた。なので被災地に送る物資のマニュアルなどを作れば改善できるのではないかなと思う。

父は、物資の管理やガソリンの都合上週に1回しか帰ってこれなかつた。家族としてはとても心配だったし不安だった。だから正直、将来は父のような職業ではなく、災害などがあっても家に入れるような職業に就きたいと思った。

震災後の生活で一番困ったのは、水と電気である。発電機やソーラーパネルなどあったら小さい電化製品、ラジオや携帯の充電器などが使えもっとたくさんの情報が得られたはずだ。水に関しても、水道管から直接蛇口ではなく家の横に設置した大きなタンクを経由して蛇口に水がいくような設備を整えれば、水にもそうは困らないのではないかな。将来は住宅に関する仕事に就きたいので今回のこと生かして、そういった設備を開発改良し推進していきたい。

サッカー部は4月16日に志津川高校の引退試合をするために南三陸町へ行った。そこは、以前訪れた時とはまるで違って何もなくて言葉が出なかつた。津波はこんなにもすごい

ものなのかというのと同時に人間の儂さを痛感した。

あの未曾有の大震災からもう1カ月以上が経ってしまった。みんなの心の中にそれぞれ色んな傷があると思うけど。今は前に進んで行くしかないと思う。被災地では復興に向けて色んな事を始めている。復興なんかできるような状態ではない地域の人たちでさえ前に進もうと必死に頑張っている。そんな中で私たちができることは、小さなことで限られた事しかないけどそれをしっかりやっっていこうと思う。

また今回の災害で、人と人との繋がりや人の優しさを感じた。この繋がりや優しさというのをこれからも大切にしていけたら世の中はもっと良くなると思う。今回の経験は一生を通じて忘れない、忘れてはいけない記憶になった。これを糧にしてこれから生きていこうと思う。

## 東日本大震災を体験して

### 2年5組21番 村上勇氣

新生白石高校とあって、1年次には新たな企画が幾つかあった。そのひとつが「SOL 活動」と銘打った野外巡検である。僕が白高に入学して半年程経った頃、そのために私が参加した5コースは、今渦中にある福島第一原子力発電所へ行っていた。そこが渦中にある理由は知っての通り、先の大震災で甚大な被害を受け、放射能が漏れてしまったからなのだが、私たちが訪れたのはその約半年も前のこと。その時は、半年後に今ここに居るこの場所が放射線に塗れ、立ち入れば命の保証も無いほどになっているとは知り得ない。その時の私はただ業務員が謳う能書きを鵜呑みにしただけだった——ゴックン。そのくせ、後に書いた感想で、「有意義だった」と書いていた自分が今となっては恥ずかしい。だから今、あの時樋口先生が言った事—氾濫する情報を吟味する事—の大切さを実感させられる。

3月11日、私は久しぶりに「生まれて初めて」な事と出くわした。——『大震災』。大きく、長く、激しく続いたあの地震。私の町も停電した。ラジオも当然地震の事ばかり。しかし、未だ少ししか情報を掴んでいなかった私は、それは一過性で1年経つ頃には風化して、「そんなことあったな—」くらいにしかならないだろうと思っていた。だが、停電は3日も続く。ラジオが伝える津波の情報、増え続ける死者・行方不明者、原発事故による放射能漏れ。体験した地震がいかに恐ろしい出来事だったかは、テレビが復活して更に実感した。特に津波は、まさに想像を絶した。町が瓦礫と化した姿は人災による焼け野原を思わせた。そしてそれにより福島第一原発では、深刻な被害を受け放射能が漏れたという。その量の単位には「ミリシーベルト」が使われていた。しかし待てと思う。果たして「シーベルト」を理解している人がどれほどいるのか。放射能が漏れた状況で、池上さんとかが冷静に説明する「シーベルト」を咀嚼できて「直ちに人体に影響を及ぼす...」という言葉信じられる人がどれほどいるのか、と。かく言う私は、「SOL 活動」で少し触れていたもので杞憂だとわかった——少なくとも今、現時点で、この場所は。

つまりは「有意義だった」と書いたのもあながち嘘ではなかった、かも。

私は今回の震災体験は、今までの生活を見直すいい機会だという先生方の意見に賛成する。学校からもらった時間を今までの自分に足りなかった事、これから自分に必要な事を考える時間にあててみた。そして自分なりに出た答は、「情報を咀嚼・吟味する力」だ。流れる情報に身を委ねるのではなく、その情報の渦に一本の杭を打つ。その杭はしっかりとして揺るがない。それは自分の「価値観」や「判断」。しかし、今は未完で、しっかりとし

た杭を打つために、これからの高校生活、あらゆることに「疑問」を持ちたいと思う。あらゆる事を真に受け入れるのではなく、一旦立ち止り、自分なりの、できれば裏付けのある「考え」を持ちたいと思う。

## 東日本大震災を体験して

2年5組22番 柳谷洸輔

3月11日午後2時46分、私は部活でグラウンドのライト側でカゴに座りながらロングティーでボールを上げていた。1人の部員があることに気がつく。「揺れている。」たしかに揺れているのは感じた。しかし、そのときは揺れが小さくすぐおさまるだろうと思い、そんなに焦りはしなかった。だが、揺れはおさまるところかますます激しくなってきた。いつもだったら大きくても震度3~4くらいでおさまるはずだった。揺れは最も大きくなった。信じられない時間を過ごした。グラウンドは砂がうごめいているかのように動き、ナイター用の電灯は左右にうちわのように揺れ、倒れるかと思った。とにかく揺れている間は長く感じた。その時、部員のみんなは家や家族のことを心配していた。自分もその一人だった。真っ先に心配したのはばあちゃんだった。ばあちゃん家は昔、宮城県沖地震に遭い、45度くらいに傾いたという話をしていたことが頭に浮かんだ。大丈夫だろうか、家がつぶれたりしていないだろうか。そう思うてしまうくらい人生で体験したことのない地震だった。その後練習は打ち切られ、どうやって帰ろうと困ったが、部員の一人の車に乗せてもらい、ばあちゃん家に行った。幸い、その周りは地盤が固く、物が一つ落ちるくらいで無事だった。そのときはすごく安心した。こんなに人の命が無事ほっとしたことはなかった。ということは自分の家も大丈夫なのだろう。そう思い、家へ向かった。その途中、道が大きく上下にずれ、とても車が通れる感じではなかったので、途中で降ろしてもらい、その光景を見て少し焦った私は走って家へ向かった。自分の家は緑が丘という丘にあるのだが、丘を上っていくにつれて道路や家の被害が大きくなっていくのがわかった。自分の家のほんのわずか離れた家3軒ほどが地割れで住めなくなっている。また、自分の家はボールを置くと転がるほど西側に傾き、水道管は五か所もやられていた。それほどこら辺は地盤が弱く影響を受けやすいのである。

家に着き、まず目に入ったのは家の庭の地割れである。長いもので3~4メートルくらいのものであった。そして家に入ると物がごちゃごちゃ散乱していて足の踏み場もないようなひどい状態だった。その時は雪が降っていてヒーターとつけようと思ってもつかない。はじめて停電になっていることに気がついた。また、水を出そうと思っても出ない。私はその時、これから本当につらい時間が始まると思った。次の日からもちろん風呂に入れず、毎日早朝に水を手に入れるために給水車の前に並んだり、食糧を手に入れるために3時間以上寒い中待ち続けた。私は普段いつも通りに水を飲んだり食べ物を食べていた日常が失われた時、はじめて水と食糧の大切さを思い知らされた。それから何日かたった後にやっと電気が復旧して家の中に明かりが灯った。私は真っ先にテレビをつけた。電気がつかない間はラジオくらいしか情報を得るものがなく、白石の周りの地域や都道府県の状態を映像として知りたかったので本当にテレビが見たかったのである。テレビをつけるとまず、どのチャンネルも今回の大震災についてのことだけしか取り上げてなかった。そしてとても衝撃的なシーンを見た。津波が町を襲い、家、車を容易に流すその映像は現実かどうかも疑ってしまうほど残酷だった。周りの現状を知った私は、本当にショックを受けた。特

日に日に犠牲者や行方不明の数が増えていくのはすごく悲しいことだった。

それから数日後、ガソリンがなかなか手に入らない中、父が津波の被害を受けた現場の現状を目に焼き付けるために見に行かないかと言った。私はその時、すごく考え込み、本当に行っているのだろうかとかと何度も思った。しかし、私は行くことに決めた。被災地に行ってその現実を見て、何かを感じ、それをこれからの自分の人生に少しでも影響を与えることができたらいいと思ったからである。そして、津波の被害を受けた荒浜に行った。海岸にすごく近いところはほとんど何もなかった。家ごと流され、土台しかなかった。道路には船があり、海水は家の二階まで達していたことが水の跡で確認できた。その現場を見て私はこう思った。「本当にこの周りに町があり、人がいたのだろうか。」そう思うくらい言葉で言い表せない光景だった。私は、そのあと、生活でつらいことがあっても、次のように心の中で思い、耐えた。「風呂に入れない、水、食糧が手に入らないと困っている自分よりも、家が流されたり、家族を失ったり、今後どうやって生きていけばいいかと悩んでいるようなもっともっともつらい現実と向き合っている人達がいるのだから、それと比べてつらいと思っている自分は情けない。」

私は今回の大震災で学んだこと、感じたことはたくさんありますがその中の2つを言います。一つ目は、水、食糧の大切さです。今回の地震で、いつも通りの飲んで食べるの生活が失われた時、それは当り前のことではなかったのだとやっと気がつきました。普段の生活であれが食べたいとか言っていた自分を思い出すと、本当にみじめに感じてきます。

2つ目は、人を信じ、助け合い、思いやりを持つことの大切さです。今までたくさんの人の協力により、なんとか生きていける時間があるのだと思います。もし、このような思いやりのある手を差し伸べてくれる人がいなくなったら、どうなっているのでしょうか。もちろん人は生きていくことが出来ないのです。私は、世界中の人が思いやりのある手を持っていることが今回の大震災で気がつきました。

私は、とにかく今が日本が一番頑張る時だと思っています。人と人とのつながりを大切にし、人を信じ、助け合うことが出来れば、日本は立ち上がることができ、もう一度強い日本になると私は信じています。私もこれから出来ることを一つ一つしていきたいと思っています。

## 東日本大震災を経験して

### 2年5組 27番 小國美奈

仙南広域に勤めている兄は、今回の地震のために起こった津波で亡くなった方々の捜索にいったらしい。いくら家族でも詳しく聞くことはできなかったが、亡くなった方々の顔は泥で汚れることもなく、寒い日が続いたため綺麗だったそうだ。本当に一瞬のうちに波にのまれたんだと思う。仙台に住むいとこが我が家のお風呂に入りに来ていなければ聞くはずのない話であったが、それまでいつものようにへらへら笑っていた兄から表情がなくなり、涙ぐんでいった時、一体兄は私がニュースでしか見ることのできなかつた現場で何を見てきたのだろうと思ひ、聞くことができなかつた。

戦後最大の死者を出した東日本大震災。生活が落ち着いたころ、父に連れられ海沿いを見てきたが簡単に言葉に表せないような現実がそこにはあつた。死者、行方不明者をあわせれば、2万5000人以上にも及ぶ今回の地震。津波の被害を抜けば、こんなにたくさんの方が亡くならずにはすんだはずだ。本当に10mをはるかに超える津波が来ると思つた

人はどれくらいいただろうか。高台に避難したとして、その高さを上回る津波が来るのを見て、亡くなられた方は何を思ったのだろうか。生き残ったとして、家族や友人、恋人、ペット、家などの全ての財産が完全に戻ることはない。しかしそんな中でも懸命に生きる人がいる。亡くなった方の分も生きるなんて無責任なことは言えない。そんな綺麗事、口にはできない。事実をありのまま受け止め、ニュースや新聞など、利用できる情報源をフルに使って、何をすべきか、そして、これからどう生きていくのか、一人ひとりの姿勢が問われると思う。

## 東日本大震災を体験して

2年5組 29番 鎌田奈月

今回、東日本大震災を体験して思ったことは、いくつかあります。こうして約1ヶ月もたってしまうと、落ち着いてきて周りの情報がいろいろと入ってきます。その中でも、国内、国外でも同じように「東北人はねばりがある」「頑張るのは今しかない」というような事が多く言われ、記事に書かれ、毎日のようにニュースで報じられていました。ですが、私は何を根拠にそんな事を言うのかな、と思ってしまいます。東北人だから何だ。今まで頑張って生き抜いてきた人たちはまた頑張らなきゃいけないのか。

「頑張れ」「頑張れ」「応援してる」

とても無責任な言葉だと思います。最初のうちは心のよりどころかもしれませんが、1ヶ月もたつとそう思うことは次第に少なくなってくるように感じます。

「頑張れ、頑張れって、いつまでなんだべねえ」

「東北人は強いって誰言ったんだが」

「もう何していいかわがねよねわ」

ある日の給水で地域のおじいちゃんおばあちゃんたちが話していました。やはり言葉ではなく行動に移さないと始まらない。そう思いました。しかし現状は悲惨で、まだ直すどころか、今なお進行して事態は悪くなっています。政府の対応は遅いし、なにも東電だけが悪いわけじゃないと思います。謝る必要はないし、むしろ同じ被災者として謝る前にすることがあるはず。つらいのはみんな同じ。悲しみに小さい大きいもない。もっともっと個人、企業、団体でもっと、具体的なことをしていけたら良いと思います。

## 東日本大震災を体験して

2年5組 30番 小松和佳奈

あの日にあんなことが起こるなんて、本当に誰も予想していなかった。

今回の3/11(金)14:46、東日本大震災を体験して、いちばん思ったことは、当たり前がどれだけ幸せで、それ以上の幸せはないということだ。電気が付く、水が出る、家があるという生活していく上で当たり前のことが、東日本から一気に奪われた。私も被災



地の人とはいえ、家もあり、家族や身内も無事で、食べるものもある。とても幸せだ。ロウソクでの生活や毎日家で暇をして、夜は電気もテレビもないから18時には寝る生活、苦しいと思ったし何度もイライラしたけど自分がどれだけ幸せなのかを考えると頑張れた。

新聞やニュースを見るたび、何度も胸が苦しくなり、涙がこぼれた。だけど、自分がしょげてないで、誰か困っている人の力になりたいと思った。そう思い始めたころ、叔父の仕事仲間と一緒に山元町へ炊き出しに行った。被災者の方々へ食事として出しているのに、「これもらっていいんですか？」と何度も言われた。精神不安定なんだなと感じた。地震から何日か経った時だとはいえ、ショックは簡単に消えない。避難所にいる被災者の方々の辛さは、私にはわかることはできないのかなと思った。しかし、そんな辛い中でも沢山の人が「ありがとね。」と言ってくれた。そのたびに心に何かジーンとくるものがあり、一言一言にとっても重みを感じた。炊き出しに来て良かったと心から思える瞬間であり、同時に、早くこの方々が本当に笑顔になれる日が訪れてほしいと思った。炊き出しのあと、海沿いを見に行っただけ、全く言葉が出なかった。その景色はテレビで見る以上のもので、同じ宮城県だとは思えなかった。中学生の頃練習試合でよく行っていた中学校の周りの景色も、本当に同じ場所だと信じられなかったし、信じたくなかった。

もう1ヶ月以上経ったが、まだ何も進んでいないと思う。崩れてしまった建物もまだほとんど片付いていないし、避難所の人たちもずっと前よりも大変になった。そんな状況が同じ宮城県で起こっているのだから、自分は少しでも力になりたいと思うし、支えてあげたいと思う。30日に樋口先生のお話を聞いて将来について考え直してみたが、やっぱり私は養護教諭になりたい。誰かが苦しんでいるときに、支えてあげられる人になりたい。まだまだこの震災での苦は続くと思うけど、この経験をこれからの自分、将来に役立てるように生活したい。1日でも早く、1人でも多くの人の笑顔が見たい。

## 東日本大震災を経験して

2年5組40番 渡辺陽子

3月11日の東日本大震災を経験して考えたことはたくさんあります。今回、特に思ったことは2つあります。

1つ目に、人を支える人の支援についてです。4月10日の朝日新聞の「フクシマ50 終わらない苦悩」という見出しの題には、こんな文章がありました。

「現場では当初、放射線量を管理する線量計が足りず、180人が線量計を持たずに作業したこともあった。食事は朝が乾パンとジュース、夜が缶詰と非常用のご飯。作業の合間に床で雑魚寝という劣悪さだった。」

作業員の被ばく量は年間250ミリシーベルト。線量計を持たずに行くということは、この値を越してもわからないということだ。身体への危険が保障されていないように見えて仕方がない。作業人が責任を感じているのもあるのだとも思うし、その人たちがいなかったら、今どうなっていたのかもわからないが、津波で生きたくともなくなっていた人たちのことを思うと、もっと命を大切にいてもらいたいと思う。また、作業するにしてももっと安全に、線量計を持って定められた値を守って作業してもらいたいと思わずにはいられなかった。また食事の内容もひどい。これは震災の数日後から、福島第一原発で働いていた人の話であるから、数日あるはず。福島まで来ることができなかったかもしれないが、ヘリコプターなどを駆使すればすぐ行けたはずだと私は思う。放射線の漏れを防ぐために、

自分の体が今後どうなるかわからない恐怖の中、危険の中で作業し、人の命を救う働きをしてくれた人にはその作業の重み、大きさに見合うほどの食事を摂ってもらいたいと思う。たとえそれが震災直後でも、人を支える人をすぐ、早く支えてあげてほしいと思いました。

2つ目に、ずっとこの震災を忘れないでいることが私にできることだと思いました。CMやニュースで、「今、私たちにできることは何だろう」といったキャッチコピーを耳にします。そのことについて私も考えました。ボランティア活動、救援物資での支援、義援金・・・すぐいくつかは、思いつきました。ボランティア活動にも参加するなら今だ！と思い参加してみました。しかしそのボランティアも白石市のものだったので、あまり行くことなく終わってしまいました。そして最近、阪神淡路大震災での教訓を生かして、仮設住宅での孤独死をなくそうという記事を目にして、今回の大震災の教訓も、次に地震や津波が来たときの防災に役立てることができると思いました。具体的には、建物の2階や3階にいるからといって津波に流されないということはないこと。北上川の河口から、5キロメートルも離れた小学校にも津波は押し寄せ、小さな命を奪ったこと。これらのことから津波が来たら高台へ行くのがよいという教訓が見いだせると思います。また、「海から遠いから」と言っても油断せず、すぐ避難できるようにしておくことなど被害を減らすための教訓はたくさんあると思いました。そして私ももしまた津波が来たときに自分の命を、周りの人の命を守れるようにしたいです。

これらが私が思ったことです。でもこれらは震災が本当に終わって後、「こうしたほうが良い」ということです。今現在、余震は完全に収まっていません。ライフラインも県北のほうは整っていません。被害にあった町もまだ完全に復興していません。被害にあった町が復興し、被害にあったすべての人が、3月11日以前の暮らしができるようになるまで日本中が頑張っていくべきだと思います。私も節電や節水くらいしかできないけれど、被災地のためにできることを少しでもやっていきます。

## 東日本大震災を体験して

### 2年6組3番 大槻弘晃

僕は山岳部の一員として亙理町、山元町にボランティアに行ってきました。現在では4回亙理町、2回山元町に行ったこととなります。ボランティアの主な作業は、瓦礫の撤去や泥の撤去、家具の移動、などです。それらのほとんどが津波による被害をうけた町民の家での作業でした。僕は実際に作業をして改めて津波の恐ろしさを感じるとともに、被災地の現状を目の当たりにし、その酷さに驚愕しました。テレビで見ただけでは、あの酷さを知ることはできないと思います。

僕がボランティアに行った家族の家は一階が津波による泥でほとんどが使い物にならない状態でした。庭には20cmくらい泥が積り、おそらく大切にしていたであろう植木にも泥やゴミ、ヘドロがへばりつき、どうしようもない状態でした。そのような中でその家の家族とボランティアと一緒に作業するわけですが、僕たちはその家を2日にわたり作業しました。僕たちは先生を含め9人で作業しました。9人で一つの家の泥の撤去、家具の移動をほぼ全て終えることができ、とても感謝されました。しかし9人で午前9時～午後3時半まで、一回の昼食休憩でやっと一軒の作業を終わらせることができるわけで、被災地の復興にはたくさんのボランティアの助けが必要であり、とても時間がかかると思いました。

私たちが訪れた亘理町ボランティアセンターには毎日300～400人のボランティアをしにきてくれる人がいます。その中で僕は県外からボランティアに来てくださった人の多さに驚きました。駐車場の止まっている車のナンバーを見ると一目でわかります。北は北海道、南は沖縄まで全国からこの宮城県のためにきてくれることに感謝します。なかでも関西から来てくれる人が多かったことに気がつきました。そのほとんどの人が阪神淡路大震災の経験者でした。ほかにも外人の留学生もきていました。本当に感謝します。

僕たちはこれからも被災地を訪れボランティア活動をして行くつもりです。少しでも役に立つことがあればと始めたボランティア活動でしたが、活動を通してボランティアは、絶対に必要であり被災者の大きな助けになっていると思いました。一人でも多くボランティア活動に参加して欲しいと心からそう思います。そして継続して活動して欲しいと思います。被災地の復興は決して短期間でなしえるものではありません。僕はこれからも日本の復興のために尽力していきます。がんばろうニッポン！！

## 避難所での感染症対策と精神的ケア

2年6組26番 遠藤裕香

今回の大震災が被災者へもたらした精神的負担は大きく、感染症の拡大も問題となっている。たとえ地震や津波の直接的な被害から逃れられたとしても、急激な生活環境の悪化や変化により、体調を崩して死に至ったケースもある。また最近では、避難所生活が長引くことによってストレスが原因のうつ状態や、高齢者が認知症になってきている人が増えている。私はこの状況を知り、被災者がまず初めにやるべきことは心身ともに健康であり続けることだと考えた。なぜなら、健康で元気といえる状態でなければ、みんなが望む日本の復興への気力も無くなってしまうからだ。そこで私は、精神的なケア何をすれば効果的なのか、感染症を防ぐには何がいいのかを調べてみた。まず精神的負担、流行しやすい感染症には次のようなものがある。

例 精神的な面

- ・環境変化によるストレス
- ・親しい人の死による悲しみ
- ・職業、住居に関する不安
- ・プライバシーに関して
- ・うつや認知症の発症や悪化

感染症

- ・ノロウイルス
- ・インフルエンザなど



では不安やストレスを軽減、また感染症を防ぐのによいのは何か？

「精神的ケアの方法」

- ・体を動かす
- ・なるべく日常に近い生活リズム
- ・人とコミュニケーションを取る  
など

「感染症への対策」

- ・マスクの着用、手洗い、うがいを徹底する
- ・運動で抵抗力をつける
- ・感染者には専用の部屋を設ける  
など

これらの中でも最も重要なのは人とコミュニケーションを取ることだ。なぜならば精神的ケアの面なら人と話をし、相談することによって気持ちが軽くなり、ストレスも軽減され

るし、感染症の面では自分の健康状態をすぐにほかの人に話すことで、感染症の発見が早くできるので拡大を防ぐことができるからだ。

今回の大震災で私は「人は決して一人では生きていけない」ということを改めて実感した。人と人とが繋がっているからこそ私たちは生きていくことができ、少しずつではあるが復興していけるのだと思う。もしかしたら、また大地震が何年後かに起こるかもしれない。そのときは、現在の私の夢である看護師の職に就き、今回で得た知識と経験を生かして被災者の心と体のケアに全力で努めたいと考えている。なのでまずは今、高校生である私ができることは何かをよく考え、できることから実行していきたい。

## 東日本大震災を体験して

2年6組27番 小川実華

3月11日。私は千葉の浦安市、某観光地にいた。親戚の家に所用で来ていたため、最終日にここに訪れることにしたのだった。着いたのは午後だったし、夕方の電車で帰る予定だった。ほんの短い時間の寄り道によって、私は宮城県人としては少し異なる震災体験をすることとなったのだ。14:16 私は乗り物が動くのを待っていた。少し動くのが遅い。そのぐらいに考えていたら、周囲がただならぬ静けさで、乗り物が動く方向とはあきらかに違う方向に揺れた。最初のうちはまだ耐えることもできたのだが、徐々に信じられないぐらいの恐怖と共に激しい揺れがその場を襲ってきたのだ。(後日調べにより、浦安では震度5強を観測)その後は泥だらけの道を歩いたり、駅前の屋根付き程度の施設でほぼ野宿…。12日になり、千葉の母の友人宅に保護してもらい、(親戚宅は地震の日から留守だったため)震災発生2週間後ようやく宮城に帰宅することができ、帰宅難民ではなくなった。さらりと書いたものの、地震発生24時間は我ながらずっと緊迫していたと振り返る。(宮城で被災した人の辛さに比べたら小さいものだが)

さて、ここで今までの体験を通して感じたことを大きく3つに分けて述べることにした。第一に、「東日本大震災」の被害の大きさだ。動けぬ状況の中で、何度もラジオを聞いたが、幾度も変更して報じられたマグニチュードは最終的に9.0になった。世界観測史上4番目にあたる。これは、私の想像に過ぎないが、この地震、揺れだけならば死亡者はごくわずかだっただろう。(3月11日震度7を観測した栗原市では今現在も死者0名)栗原市は、数年前に起きた岩手・宮城内陸地震で、古い建物はすでに倒壊していたことを考えると例にはふさわしくないかもしれないが震度7である。日本中が驚くべきことには間違いないと私は思う。日本で一番地震の恐ろしさを知っていて、尚且つ訓練されている宮城なのだから、このぐらいの地震でもまだどうにかなっただろう。問題はやはり津波ではないだろうか。いくら訓練されてたとはいえ、島国やリアス式海岸の使命は防ぎようがなかったと感じている。堤防をも超えた大津波は、この震災で亡くなった方の死因を9割水死にすることを軽々しくやってのけたのである。津波の恐ろしさと共に、私は自然の恐ろしさや人命の儂さを感じた。遺族にしても、阪神・淡路大震災では、行方不明者は3人の所に対して、今回は行方不明者は万単位にのぼり、今も増え続けているのである。人が亡くなることは悲しいことだが、遺体が見つからないのはもっと酷だと私は思った。そして、再び津波を伴う余震が来ると報道を聞き、自然の無情さを再び思うのだった。

第二に、震災後の周囲の動きについてだ。首都圏に当時いた私は、首都圏の交通網の脆弱性に呆れた。これは点検等もあったのだろうし、仕方ない点でもあるが、首都圏直下型

でもないのに、ここまで交通網が乱れてたことを思うと、もしそれが本当に来たら、東京は崩壊に近い被害を受けるのだろうか。...などと勝手に考えてしまった。また、通信網の脆弱性も目立ったように感じた。これだけ情報化社会と世間では言っていたのに、震災後私の携帯電話はただのおもちゃと化していた。「twitter」等ではユーザー間の情報交換が活発だったらしいが繋がらないのでは意味がないと私は思った。また、インフラの脆弱性も目立った。あと原発も...と脆弱性について述べたらキリがないのでここまで止めておくが地震についてしっかりと意識していたのは、宮城県人だけだったのだなあと思えてきた。これらの脆弱性は、日本が地震が多いことを意識していないことの表れなのではないだろうかと思った。地震に対する意識の温度差の表れだとも思った。仕方がないことだとは思いますが、とても残念な点だと感じられた。だが、世界のすぐさま見せた「Pray for Japan」には感動した。空母等の手厚い支援をしたアメリカを始めとする諸外国の日本に見せた支援の大きさは驚くべきすごさだ。特にスウェーデンの在日瑞典人に対し、避難命令をしなかったところに私は感心をよせた。(政府の対応については、絶句ということで省略。大人の事情は分かりません)

第三に、やはり日本人のすばらしさだろう。震災に遭って私と母は帰宅難民として2週間ばかり過ごしたが、その間に何人もの人に助けてもらっただろうか。その感謝は計り知れないものである。送信困難な中で何回もメールをくれた遠くの友人たち、道を教えてくれた人たち、交番のお兄さん、一緒に晩を過ごした人たち、母の荷物を持ってくれたお兄さん、2週間も私たちを泊めてくれた一家、白石に帰るとき、高速バスの停車駅まで迎えに来てくれ、ガソリンが足りない状況にも関わらず、白石の自宅まで輸送を快く引き受けてくれた眼鏡屋のお姉さん。帰るまで心配してくれたお父さんや親戚の方。人生の中ではさまざまな人々に助けられてきたはずなのに、こういう機会ですべて感じるのもおかしな話だが、この日本中が危機の中で私たち親子を助けてくれた人たちのことを私は一生忘れないと強く思う。デマに流されたり、当事者ではないからといって知らぬ顔をしている人、火事場泥棒だっているけれども、東日本のためを少しでも思ってくれる人が沢山いるから私は日本人でよかったと心から思う。この震災は、日本人に少なからず影響を与えたが、私はこのことを忘れずに、自分でできることから東日本の復興を支えていこうと思う。

## 東日本大震災を経験して

### 2年6組 28番 管野宏香

地震の日、学校に来ていた私は父や足の無い生徒と共に車で帰った。真っ暗な道は、車のライトで照らされると亀裂が入ったり崩れたりしている。ラジオでは、津波の様子が伝えられていた。最初は、アナウンサーが何のことについて言っているのか理解出来なかった。踏み切りの遮断機が下りたままになっていたのも、いつもの道は使えず、遠回りして家に向かう。とにかく、家族と連絡がつかず、不安だったことを覚えている。

ライフラインが全て絶たれたことを知る。携帯のテレビで、海岸沿いの町に何が起こったのかを知る。福島原発がヤバイ、ということを知る。その日からしばらく、太陽に従った健康的な生活が始まった。ただし、食べられるものは限られている上、風呂に入れないから不衛生。布団の中で眠れない日々が続く。何度も悪い夢ではないかと思った。電気が全く通っていない宮城の空は明るい。星と月が驚くほど美しく、ベランダに出ればヘリコプターのものと思われる赤い光と羽音が聞こえた。酷くむなしくなった。野生の動物や、

我が家のペットたちからしたら、「いつもより暗くなるのが早いな」という程度の認識なのだろう。日が昇ればスズメやカラスが鳴き、犬は吠え、猫はビタミン摂取を始めるのだ。

大切なことは、情報をはき違えないことだと思う。放射能放射能と騒ぎ立て、それが何かも良く分からず、被災地を見捨て逃げゆく人々に私は憤りを覚えた。原発のことばかり騒がれる福島だって、津波の被害を受けているというのに。被爆して、吊って貰うことすら出来ない人々がまだ沢山瓦礫の下にいるというのに。それが徐々に忘れ去られていくようで、いつも心の何処かに突っかかるものがある。久しぶりに友人と再会しても、そのことが影を落とすような気がする。騙されてはいけない、忘れてはいけない。そしてなにより諦めてはいけないと思う。復興には時間がかかるだろう。私達は大きな被害を受けた場所のすぐ近くにいながら生きている。それはとても幸運なことだと思う。生きているということ、いざとなれば誰かに手を差し伸べることができるという幸運だ。

先日、よく釣りに行っていた港を訪れた。見慣れた景色が消えていた。改めて、この場所で何が起こったのかを知る。車でほんの少し行けば、そこに現実が広がっている。酷く海のヘドロの匂いがした。破傷風菌など、恐ろしい菌を纏っているかもしれない海底のヘドロのせいだそう。津波は普通の波と違い、黒いと聞く。破壊し尽くされた町を見て、この町で生き残った人間がいるなんてとってしまった。その人達は本当に幸運だ。けれど、彼らに会ったときにかける言葉が見つからない。どんなに捜しても見つからない。「がんばれ」なんて口が裂けても言えない。迷っているうちに、逆にこちらを笑顔で励ましてくれる被災者の方も見る。今、自分に出来る事が見つからない。

たとえ何か出来たとしても、私一人の力では事の大きさに比べて蟻にも劣るだろう。ならば、団結しなくてはならない。今こそ、皆の思いを一つにする時なのではないだろうか。無論私にそんな力はない。皆の心を一つに纏め上げるような器を持ち合わせてなどいない。そんな英雄じみた人間はそもそも何処にもいないかも知れない。だから、一人一人が意識して思考し、行動することが大切になってくると思う。

誰かが誰かを助けてくれる。そんな幻想は捨てるべきだ。自分があの人達を救う……たとえ何も出来なくても、そのくらいの心構えでいたい。

## 東日本大震災を体験して

2年6組30番 木村泉

私がこの東日本大震災を通して思ったこと、考えたことはたくさんあります。ありすぎて覚えてないぐらいあります。きっと、これを書いていくうえで、もっと考えさせられることが出てきます。だから、まとまりもなくグダグダになりますが、気にしないでください。

まず、3月11日金曜日14:46、私は白石へ向かう電車の中にいました。地震のせいで、2時間以上も電車の中に閉じ込められ、線路の上を歩いて、東白石まで行きました。そこから、父に迎えに来てもらい、家に帰りました。家に着いたのは19時で、外も暗くなっていました。家の中を見ると、ロウソク3本に火がついてました。茶の間には、母・兄・祖母がいて、みんなの顔は不安でいっぱいでした。もちろん、私自身もこれからどんな生活が待っているのか想像もできませんでした。しかし、みんなが不安に駆られてはいけないと思い電車の中であった、たくさんの出来事を話し、明るいムードを作ろうと努力しました。ロウソク3本分という少ない明りではありましたが、みんなの笑顔が見られ、

ホッとしました。11日の夜は、カップラーメンを食べました。電気もなければ、水も出ない……。当たり前の生活が一瞬で嘘のようになってしまいました。いつも入れてた温かいお風呂も、学校や会社に行く人でいっぱいだった電車も、友達とのメールのやりとりも、全てが当たり前ではないと思い知らされました。まさか自分が被災者になるなんて……。どれ程不安で、どれ程不便な生活か、この時知ることができました。

私たち家族は次の日から、役場に行き配水してもらいました。両手にタンクを持って、役場と家を何往復もしました。スーパーに1時間以上並びました。この繰り返しが何日も続きました。そして、水も電気も使えるようになり、自分の知らなかった、本当の自然の脅威を見せつけられました。テレビで見た光景は、とてもむごいものでした。まるで、空爆にでも遭ったかのような……。戦場のような光景。私は、息をすることを忘れました。今までは、ラジオでしか聞くことしかできず、想像よりはるかに予想上回っていました。新聞でも、家族・家・財産・思い出を失った人たちの苦痛な叫びが載り、心に強く刺さりました。目の前で妻を津波に飲み込まれる瞬間を見た夫の記事……。涙がとまりませんでした。私が思うよりももっと、苦しい思いをしているんだと考えると、心が痛いのです。そして、私自身も自分に何ができるのか自問自答する日々。こんな私にできることはないと感じながらも、ボランティアに行ってきました。避難所となっているはねっこアリーナに行き、荷物運びや配膳、話し相手をしました。福島から来ている人が多く、家がないという人もいました。家もあるし、家族みんながいる私が、そんな人に言う言葉を見つけることもできず、黙り込んでしまいました。自分の無力さに改めて気がつき、避難している人たちに、「ありがとう」と言われ、思わず泣いてしまいました。何も力になってあげることができないのに、なんで「ありがとう」と言われるんだろう。嬉しい思いではなく、悔しい思いでいっぱいになりました。生徒会長の光馬先輩が派手に動いていると聞き、私にも手伝わせて欲しいと言ひ、物資を集めました。自転車に乗らないだろう……。というぐらひの物資を先輩方は、山元町まで運びに行きました。どれだけ強い心を持っている人なんだろう。白高を背負う男は違うな。と尊敬しました。

この震災を通して、世界中の人たちの温かさを感じました。どうして、顔も知らない人たちの為に行動ができるのだろうか。私はこれをずっと考えていました。答えは意外と簡単！それは『心配だから』ただそれだけかな？って思ってみたりもしました。助け合い、支え合い、生きていく……。これは簡単なことではないと思っています。でも、日本は今、それをしようとしています。しようとしている中で、犯罪をする人は死んでいいと思ってたりもします。思っちゃいけないけど……。すごく悲しいです。被災地のことを思って支援してくれる人がいるのに、被災者が犯罪を犯したり……。マスメディアもそういう影的なものを報道しないですよね。助け合っているとかわいいことばかりを映して、被災とは別に傷ついてる人もいるのに……。これも、自然の脅威なのかなと感じました。土地を変えてしまうだけでなく、人間性も変えてしまう。恐ろしいものです。でも、人間は自然と共存していかないといけない。この東日本大震災を機に、考えていけたらと思います。この東日本大震災を通して、地震や津波のデメリットだけではなく、メリットを見つけることもできました。デメリットはだれでも見つけることはできます。しかし、メリットは実際に被災者になってみないと分からないと思いました。デメリットは、建物の破壊や、大切なものを奪う怖さ、人間性・環境を変えるなど。メリットは、生活のことを見直す良いきっかけになった、家族内での会話が増えたことです。自然の脅威・人間の無力さ、儂さ、弱さを感じる反面、人間の温かさ、強さに気づかされました。この現実と向き合い、受け入れようと思います。

普段使わない脳みそを使いました……。こんなに考えさせられるなんて……。滅多にできない貴重な体験がたくさんできました。これをバネに頑張っていきたいです★☆☆

## 東日本大震災を経験して

2年6組36番 橋本葵

今回の大震災で私は多くの人のさまざまな思いにふれました。まず、3/11の震災直後。もちろん携帯電話が通じる訳もなく、家族がとても心配でした。白石で部活をしていたので、テニス部のみんなや先輩方が近くにいてよかったです。ラジオからは「10m以上の津波が…」と繰り返し聞こえ、「亘理の方が大変」「仙台空港がのみ込まれた」と聞こえてきて本当に、本当に早く家族のもとへ帰りたかったです。父が空港近くの工業団地に勤めているため、気が気でなくじっとしていられませんでした。私はこのとき初めて、大切な存在を失うかもしれないという恐怖を感じました。その後、先生に自宅近くまで送っていただき、停電で真っ暗な道を歩き自宅に着きました。そのときは「こんなこと言ってる場合じゃないよな…」とも思ったけど、今まで生きてきて見たことないくらいきれいな星空で、よくわからないけれど複雑な気持ちでいっぱいでした。幸い、父を含め家族全員は無事に家にいてほっとして自然と涙がでました。けれど、私のいとこの5歳の男の子が幼稚園のバスごと津波で流され、まだ安否確認が取れていないと聞きました。テレビでの映像がない分、ラジオだけではなかなか津波の大きさとその被害があまり想像できなかったけれど、どうか無事でいてほしい。そう願うばかりでした。

翌朝、新聞をみて言葉が出ず、ただただ新聞を見つめていました。いとは、泥だらけになりながらもなんとか命は助かったものの、同じバスの友達がたくさん亡くなってしまったと聞き涙を流すばかりでした。その日からわたしは、亘理町内を駆け回り被害状況や食糧の確保をしていました。わたしの自宅は亘理のなかでも山の方なので津波の心配はありませんでしたが、同じ亘理町でも荒浜地区は壊滅的な被害を受けてしまいました。本当に幸いなことは、私の身内で亡くなってしまった方がいなかったことです。停電中は真っ暗な上に食糧も少なく、とても辛かったです。何度も泣きました。でも、私には家族も友人もみんなそばにいます。それがどれだけ幸せなことか考えたら、こんなことで泣いてなんかいられないなと思いました。

“退屈“と言ってはあまりよくは聞こえませんが、何もせずにただただ余震に耐えていたときに、友達が「ボランティアしない？」と声をかけてくれました。どうせ家でダラダラしているなら人の力になろう！と、思い、ボランティアセンターまで行きました。それから約1カ月間ほぼ毎日活動を行い、すごく充実した1カ月になりました。私を誘ってくれた友達に感謝と、自分も被災者ながらも自分から行動をしようとしていたことをすごく尊敬しています。ボランティアに行くと、自らも津波の被害に遭いながらも、活動に来ている人も多く、「すごいなあ」と思うばかりでした。津波の被害に遭った住居の泥の排出作業、物資の配達、受付、全国から次々に届く山ほどある支援物資の仕分け作業。さまざまな役割を多くの人が責任を持って取り組むことで、私も、いつかは必ず自分の町を前以上に素敵な町にしたいと強く思いました。下を向いてばかりじゃ前に進めない、だから少しでもみんなを上を、前を向いて歩いて行くために、微力ながらもお手伝いを続けて行きたいと思いました。



## 東日本大震災を体験して

2年6組38番 水上智佳子

3月11日金曜日午後2時半頃、丁度私は家に帰ったところだった。その十数分後、東日本大震災が起こった。私の住んでいる所は岩沼で、震度6弱だった。とても大きな揺れだった。一瞬、ただの地震だろうと思っていたが、それは長く続き、本やCDが勢いよくガタンと落ち、TVの画面が消え、水が出なくなった。今までで一番ビックリしたかもしれない。そんな事が一週間ぐらい続いたのだから。唯一のライフラインと言ってもよいラジオをつけてみると、閉上で100体、荒浜で100体、、、と死亡報告が流れていた。何が起きているのか分からなかった。どうして地震でそんなにも死者が出るのか、、、。原因は津波だった。津波20cmで大人一人をのみ込むと言うが、それが何十mだ。私には想像すら出来なかった。親戚の一人も飲み込まれてしまった。

私はじっとしていることが出来なかった。このまま何もしないでいることが嫌だったからだ。私は3日経った頃からボランティアを始めた。炊き出し、地震の被害を受けた家の片付け、泥かき、どれも大変だったけれど、人の為に働くことは、楽しかった。“ありがとう”と言われたときは、こんな私でも役に立てるんだ。と、ちょっぴり嬉しかった。

助け、助け合い、喜び合い、人が居て、人との繋がりがあることはとても暖かくて素晴らしいことだと思った。と同時に、変わってない様で変わっている日常は怖いと思った。

## 東日本大震災を体験して

2年7組5番 岩槻和佳奈

今回起きた、東日本大震災で、私は多くのことを学び、体験しました。水、電気も無い生活や、荒れ果てた街など、どれも初めてのことばかりでした。中でも、一番強く感じたのは、津波の恐怖です。何が起きているのか、全然わかりませんでした。普段はあまり車が通らない家の前の道路も車で溢れ、事故も起きていました。私は、津波よりもむしろ、自分だけが助かろうとする人の必死さが怖かったです。車を降り、走って逃げる人もいて、私はその様子をただ庭から見つめるのが精一杯でした。続く余震、降り始め雪。戻らない電気、少しずつ暗くなる空。全てが、異様な光景に見えました。時が経つにつれて様々な情報が入り、そして明らかになる被害を、信じられない思いで聞いていました。今まで生きていた中で、一番長い夜でした。

次の日から、電気も、水もない生活が始まりました。井戸水を汲み、本家のおばあちゃん家のかまどで、まるで昔のようにご飯を作りました。初めてのかまどご飯は美味しかったです。電気が無いと、全て手作業で行うようなので、一日一日がとても速く過ぎ去っていきました。悲しんでる余裕なんて、ありませんでした。だから、それはそれで良かったのかな、と思っています。

それから、数日経って、街を見に行ったとき、本当に言葉を失ってしまいました。大谷の街全体が廃墟のようでした。泣きながら走った駅伝の道も、バーベキューした浜辺も、通り慣れた友達の家も、全てがありませんでした。涙が止まりませんでした。亡くなった友人や、知り合いとの思い出が次から次へと浮かんで来て、もう戻れないんだという現実を突きつけられたようでとても悲しかったです。遺体安置所へ行った日は眠れませんでした。失礼な言い方かもしれませんが、怖かったです。崩れかけた家から、必要なものを取

り出す手伝いもしました。水が引いてなくて大変だったし、酷い悪臭が漂い、精神的にも疲れる作業でした。それを毎日こなす自衛隊の皆さんはすごいと思います。

気仙沼の街もかなり壊滅的でした。復興するまで、長い時間がかかるでしょう。でも私は、復興し、皆が楽しく暮らせるようになるまで、何年でも協力します。大好きな、大切な地元の為に私の青春を捧げます。

## 患者さんを優先する覚悟とともに笑顔あふれる看護師になりたい

2年7組6番 大内郁美

私は地震が起きたときに一人でいました。突然家が揺れ、一瞬何が起きたかわからなくなり、慌ててこたつのなかに隠れ、テレビをつけました。3月9日に起きた地震よりも大きく揺れ、テレビに映っている映像は、今までみたこともないくらい酷いものでした。地震がおきているとき、私が一番最初に考えたのは家族のことでした。震災後の登校日に「今回の震災で、医療現場では、家族のことを気かけながらも現場に何日も留まり救護にあたっている看護師の姿を見てどう思ったか。今回のようなことが起こった場合、家族のもとに帰らず仕事を覚悟があるだろうか？」と先生に問われた。私は、その時自分にその覚悟があるのか正直考えられませんでした。でも今、私は大切な人の安否がわからなくても、誰かのために何か役に立ちたいと思い、看護師になろうと強く決意しました。報道されているニュースを見て、患者さんが病気や怪我の心配以外にも、家や家族のことについて心配していると感じました。そんな不安を減らすことはできないかもしれませんが、少しでも患者さんに笑顔を与えられるように、私はどんなときでも笑っていようと思います。“笑顔は笑顔をつくる”私はそう思います。だからどんな状況になっても、患者さんのそばで、患者さんが笑ってすごせるような環境をつくりたいと思いました。この地震で、前よりも看護師の責任について考えるようになり看護師の仕事と向き合うようになりました。今の私には、家族よりも患者さんを優先する覚悟があります。どんなつらい仕事でも私は絶対に看護師になりたいと思っています。

## 東日本大震災を体験して

2年7組22番 杉山可奈

震災から一カ月以上経った今現在、私の従兄弟は未だ発見されていない。私の母の実家は岩手県陸前高田だ。従兄弟には結婚したばかりの妻と、生後10カ月の娘がいた。幸い、その二人は無事だったものの、一家の大黒柱を失ってしまった。

「地震が起こる前の日に、七海（娘）のおもちゃの電池を全て新しいものに替えていったの。“まだあるのに”って言っても、“すぐなくなるんだから”、って。今思えば不思議なくらいだった。」

私たちが母の実家を訪れた時、涙ながらに奥さんはそう話した。従兄弟は正義感が強く、誰にでも優しく、いろいろな人から好かれていた。私たち姉妹も従兄弟のことが大好きで幼い頃はよく遊んでもらったものだった。こんな性格もあって、彼は地元の消防団に入っていた。3月11日、地震があった時にも消防団として動いていたそう。

「ああいう性格だし、多分最後に逃げたのだろう。」と奥さんは話す。そして津波にのまれ

た、と。娘の名前にも「海」という漢字を入れるほど、海を愛し、海と生きてきた彼は今、何を思うのだろうか。海を憎んでいるのだろうか。残念ながら聞くことはできないが、おそらくそれはないだろう。しかし心残りはあると思う。もっと娘のそばで成長を見ていきたくったと思うはずだ。

3月11日、14:46。未曾有の被害をもたらしたこの地震で多くの人の生活が一変した。家が流され生活の場を奪われた人や、こうして家族を失った人がたくさんいる。それを思うと、私は恵まれているなとつくづく感じる。家族もいて家もある。この地震で感じたのは、当たり前前の生活がこんなにも恵まれた生活なんだということだった。帰る場所がある、帰れば家族がいる、という生活がこんなにも幸せだったとは、この地震が起こるまで考えなかつただろう。そしてこうして従兄弟を亡くした今、あらためて「命」というものがどんなに尊いものなのか感じさせられた。看護師という職業に携わる上で、いつだって目の前にあるその命の重みがよく理解できたと思う。今回の地震は失ったものだけじゃない。前を向いて、以前よりも良い日本にしていこう。がんばろう、日本、がんばろう、東北！！

## 東日本大震災を体験して考えたボランティア

### 2年7組25番 高野清楓

「おはよう」「ってきます」今日も交わされる何気のない会話。しかし、そんな日常が訪れなくなるとは誰も思わなかつただろう。3月11日午後2時46分、東日本大震災発生。地震、津波・・・一瞬にして多くの大切なものを奪っていった。多くの思い出。多くの故郷。そして、多くの“命”。自分の住んでいる地域の被害は、それ程大きなものではなかつた。ラジオから聞こえてくる悲惨なニュース、テレビに映る荒れ果てた地。例えると、それはまるで戦後のようだった。・・・言葉が出ない。

“ここは本当に今までと同じ日本なのだろうか”

“夢なのだろうか”

何度、自分の心に問いかけたか分からない。ただ真っ直ぐテレビを見ている自分に何が出るのだろうか。同じ日本人として、同じ東北人として、同じ宮城県民として、少しでも力になりたい。共に助け合っていきたい。そして参加した市のボランティア。主に、民家の片付けのお手伝いであった。

“ありがとう。涙が出るほど嬉しいよ。”

この言葉を忘れる事はないだろう。ある日、いつも通り流れてくる避難所のニュースを見ていた。ボランティアの方々が血圧測定をしたり、足浴手浴をしている光景を目にした。

「日に日に具合悪くなる方が増えてて・・・しかし人手が足りないもんで。」

その言葉を聞いた時に私は考えた。“看護学生派遣”ボランティアである。血圧測定や、足浴手浴は、普段習得している分野だ。そこで、私たち看護学生が被災地へ足を運び、出来る範囲で習得した分野を行う。そんなボランティアがあればいいなと考えた。これから先何十年、また大きな災害があるかもしれない。その時には自分は社会人となり、自立している頃だろう。看護師として一生懸命働きつつ、自分の手で“看護学生派遣”を実現させる。絶対に・・・今は日本の早くの復興を祈って、力になることを少しでもしていこうと思う。必勝日本！！必勝東北！！必勝宮城！！

## 私の体験

2年7組31番 星美沙紀

3月11日14時46分、携帯電話に届いた緊急地震速報が鳴り響き、その数秒後に大きな地震が発生しました。私は当時、父の兄夫婦とスーパーで買い物をしていました。3人でその場にしゃがみ込みました。品物は倒れ、私の服はお酒の瓶が割れてびしょびしょになりました。揺れが止まないうちに停電でスーパーの中が真っ暗になりました。やっと地震がおさまり、倒れた棚をかき分けながら、外に出ました。外には、スーパーの看板が落ちていました。すぐに父に連絡を取り、とりあえず安心して父の兄夫婦と一緒に帰ることにしました。余震の中の運転。国道6号線は陥没していました。約1時間後、私達の乗った車の前を黒い水が横切りました。私は「津波だ！」と叫びました。私達が走っていたところは海から約3km程離れているところで、まさかここまで来るとはと驚きました。急いでUターンをして、津波からはなんとか逃れ、父方の祖母の家に行きました。そこで、ようやく落ち着いて分かったことは巨大な津波が町を襲ったこと、親戚や友達と連絡が取れないこと。そして、母方の祖母が行方不明だということでした。その夜はろうそくを灯し、ラジオを聞いて、みんなで固まって過ごし、余震の続く中で十分な睡眠はとれませんでした。次の日の早朝、父と兄が祖母を探しに行きましたが、どこにもいませんでした。数日後、祖母は近所の高台に避難をしていて、自衛隊のヘリで救助されました。見つかって、家族一同が安心しました。しかし、親戚、先輩、後輩が亡くなったことを聞き、とても胸が痛みました。

今回の大震災でたくさんの方に支援されています。私の地元では、愛知県、兵庫県ナンバーの消防車を見かけます。また、自衛隊の方々もよく見かけます。全国がひとつになっていると感じました。私自身は、友達から電話での励ましや服の寄付をしてもらい、とても嬉しく思いました。それを受け、私も何かやろうと思い、母校の中学校に避難している小学生の遊び相手のボランティアをしました。不安でいっぱい小学生と元気に遊んであげました。小学生も少しは元気を取り戻すことができたのではないかと思います。

4月5日、私は震災後初めて自宅に行きました。言葉にできません。何も残っていないのです。私は、必死にアルバムを探しました。見つかるわけもなく、日が暮れて、その場に立ち尽くすことしかできませんでした。また、私の出身小学校の変わり果てた姿を見て泣きたくになりました。思い出の地が無くなってしまったことが残念すぎます。小学校の先生と話しましたが、やはり廃校にするしかないと言っていました。

3月11日に町も思い出も一瞬で消えてしまったことが悔しくて悔しくてなりません、これから復興に向けて頑張っていかなければならないと思いました。それと同時に看護師になろうと改めて決意しました。